

▽ 学生関係 △

— 追想記 —

あの時を追想して

尾 立 源 和

もうあれから十年にもなるかと今更乍ら驚かれる。当時七十五年間は青いものは生えないと云われた浦上の島には、麦も実り野菜も青々としている。又全くの廃墟と化した我が長崎医大も、十年後の今日、病院は略々以前の形態に復帰し基礎教室の建物二棟が浜口の丘に聳え立っている。その中で昔の様に研究にいそしみ、学業に励んでいる姿を見る時、よくもまあこゝまで復興したものだ感慨深いものがある。

丁度あの日の前日は八日の大詔奉戴日であった。運動場を集った全学の職員学生に、東京から帰られたばかりの角尾学長が広島爆撃の模様を話されたのだつた。その言語も絶する惨状と新型爆弾の驚異的な破壊力とを。まさか其の翌日我々の長崎が第二発目の御見舞を受けようとは——夢想だにしなかつたのだが。八日の夜は我々の級が防空当番に当たっていたので、蚊に刺されながら各自受持の教室に寝たのであつた。

明くれば運命の日、八月九日である。この日の朝の八時頃から警戒警報が発令されていた。頻回の警報発令で、大切な授業がさつぱり出来な

いといので、警報中と雖も講義を続け、空襲警報と同時に部署につくと改正されたばかりであつた。従つて我々は八時からの角尾教授の内科臨牀講義を聴いた後、殆んどがポリクリに出ている。私自身は医療隊の本部（当時の本館患者係）に残つて電話の番をしていた。暑い盛りではあつたが黒の制服にゲートルを着けていた。机の上に貴重な弁当箱を置いて其の上に制帽をかぶせていた。確か岩波文庫の「恋愛と結婚」を読んでひとり殺風景な心を慰めていたと思う。十時半頃だつたか本部に未だ警報は解除されないかと聞いてみたのだが、継続中という返事で、其後何の音沙汰もなかつた。

十一時頃だつたろう。突然ピカーツと稲妻のように少し青味がかつた強烈な閃光が走つたかと思うと、物凄いな音響が怒濤のように轟いた。本能的に机の下に潜つた。八月一日同じ場所で爆弾攻撃の洗礼を受けていたので、直撃だと直感した。こわく／＼眼をあけてみるとあたりは真暗闇だ。すつかり観念してジーツとしてみると、やがて霧がはれるようにスーッと明るくなつた。眼前には、天井の梁とか何とか、何処にこんなものがあつたのだらうと思われような沢山の大きな材木がめちやくちやに積み重つて落ちている。それをかき分けてはい出す。隣に坐つて事務を執つていた老人が倒れているので抱き起したが元気がない。引きかっいで窓から玄関の方に降したが、ぐんなりしてそれきりだつたように思う。はつと大事な食糧を忘れたことに気がついたので部屋にとつて返したが、何処へ吹き飛んだのかあとかたもない。同室の他の人達は幸い出口から逃げ出したらしい。

本部と連絡を取ろうと思つて受話器をはづしたが交換手が出ない。――

其の時は既に交換機はレバーを握つたまゝ命絶えていたのであろうが——これは大変な事になつたぞと予感した。

外来の廊下に出る。右往左往する人の姿はあまりない。廊下の真中に白衣を着た学生が血だらけになつてうづくまつている。かけ寄つてみると専門部総代の北郷君だ。大したことはないぞ、元氣を出せと言つたが、弱々しい声でもう駄目ですと言う。そのまゝにして玄關の外に飛び出す。西森君他二、三人が呆然と突つ立っている。オーと声をかけただけ。ふと眼下の街の方を見ると、これはどうしたことだろう。全くの火の海だ。家の形が見えない。人影も人声もない。不気味な一種の静けさの中で、たゞ猛々と燃え続ける火、火。この光景をみて初めてこれは例の新型爆弾に違いないと思つた。

とにかく本部に連絡をとる積りで本館から内科、耳鼻科の建物の横を通つて走つた。どの病棟だったか、一部に火がついていた程度で、大部分の病棟には未だ火の手が上つていなかったように思う。前の爆弾の際見事消火に成功したので、人手さえあつたら病院の方は焼けずにすんだらうと残念に思うのだが。

基礎教室のある浜口の丘も同様に火の海、もうこれは駄目だと思つた。不思議なことに火の中から逃げ出す筈の人の姿が全く見られない。——後になつて思えば、一瞬にして建物の下敷になり、その上を火でなめられたわけだから当然のことなのだが。——下級生は丁度講義を受けていた筈だが、とても助かる見込はなさそうだ。後日、焼跡に行つて見たら、講堂の跡に何十人もの整然と並んだまゝの黒焦げの死体が発見された。これほどむざんな光景がまたとあらうか。勃然たる憤怒を覚えた。然し

極く少数の人は運よく逃げ出したらしいが、結局は基礎教室関係は全滅したのだ。一応危地を脱した者は、自分は助かつたのだと思つていたろうから益々あわれである。眼科教室の横に牛が倒れていた。そこで正君と会つた。彼が誰とか先生が倒れているから助けに行くんだと怒鳴つたようであるが、後日彼に聞いて見たがさつぱり分らんということ。皆が無意識の状態で行動していたのらしい。血だらけの人達が三々五々お互に肩を組み手をとりに合つて裏の山の方に避難して行く。白衣の上に血を浴びているので一層凄惨な感じがする。看護婦らしい人をおぶつたり、手を引いたりして精神科の所の崖を救回上つたようであるが、顔も、名前も、助かつたかどうかとも知らない。

僕等のグルッペは卒業試験で精神科を廻つていたので、氣になつてかけつたが、学生の本拠地である木造の別館はべしやんに潰れてしまつている。人声もないので皆んな逃げたらしいと安堵したが、よく見ると人が下敷になつている。動かない。木片を払いのけて見ると級友久保君だ。鼻や口から血が——既にことぎれている。彼には妻子があつて、卒業試験のすむのをあんなに楽しみにしていたのに、可愛想にと思つた。実は前日の八日の夜、我々のグルッペは調教授の外科の卒業試験を受けたのだつた。主に頭部の外傷について訊かれたが、途中で空襲警報が発令されたので試験は一応合格したことになつた。其の翌日当の久保君が頭蓋底骨折で死亡するとは、運命もあまりにいたざら過ぎる。此の精神科の建物には専門部の人達も十数人居たらしいのだが、後で殆ど死亡した。

上の鼻で総代の久野君と会つた。手を怪我しているし、顔も血だらけ

だ。「俺は山の上で死ぬよ、遺言を書き度いのだが何か持たんか」と言う。あゝそうかと言って万年筆を渡した。覚悟のよかつた彼が助かつたことを聞いて、遺言は何だつたらうかなあととで気になつた。誰か繻帯をしてくれといふので、ゲートルを解いてそれをぐる／＼巻いてやつた。又夏というのがた／＼ふるえている学生が居たので上衣を貸したりしたら、自分も半裸になつてしまつた。

畠の中にはごろ／＼寝転んで呻いている人々、坐り込んで放心した様に下界の地獄絵を眺めている人々。あちこちで「水をくれ、水をくれ」といふ悲痛な叫びがきこえる。一口の水を求めて穴弘法の方へはい上る人の行列が続いている。中には一糸まとわぬ女性のあらわな姿もある。恐らく衣類は吹きちぎられたか、或は火がついたので引きちぎつたに相違ない。風は穴弘法の山の方に吹いていたが、火の手は此処迄届きそうにはない。が其の夜を此の場所で明かした大勢の人達は、燃え盛る猛火を前にしてどんなに恐怖と不安におびえたことだろうか。

僕自身は更に山を登る。途中俄雨に遭つたようである。青かつた畠もすつかり灰色に變つてゐる。葉っぱといふ葉っぱは吹きちぎられ、南瓜等がブス／＼くすぶつてゐる。ひもじさのあまりこんなものを食べて、唇にぶつ／＼を生じて死んだ人もあつたという話である。山中の大きな松の木があちこちで地上一間位の高さでボキリと折れている。物凄い爆風に驚嘆したが、それにしてもこんな高い山までやられようとは思ひもかけぬことだつた。此のあたりから下を見ると、一面火焰に包まれて何処が何処だかさっぱり見当がつかない。たゞ三菱兵器の附近が、まばらに火を噴いている位のもの。全く此の世の地獄というか、世界の破滅を

思わせるような光景である。

べしやんこになつた兵舎の横を通つて峠に出た。西山方面には火の気が全く無い。山一つ隔てゝ反対側は全くと言つていゝ程の平静さだ。ほととしたと同時に一種の異様な感じがした。こゝで級友の古賀君にあつた。お互に無事を祝したのだが彼はあとで死亡した。鳴滝の下宿に帰り着いたのは昼の二時頃だつたらうか。未だ誰も歸つていない。

こちら方面では窓ガラス等が吹き飛んだ程度なので当座はそう大事とは思わなかつたらしい。早速握り飯を戴いた。情報を知らせる為無理な山越えをしたせいか、そのおいしいこと。後できくと殆んどの人が飯を食えなかつたらしいから、すぐに食べられた僕などはさしずめ助かる方の組だつたのだから。

救助の本部が勝山小学校にあると聞いたので出掛けたら丁度大島君と會つた。古屋野教授が頭に繻帯して担架を持つて居られる。金比羅山の上は大和田野講師がいるそうだから連れに行くのだとのこと、それじゃ我々が参りましょうと、山上の小屋迄駆け登る。此処には大学関係の人達が大量收容されている。調理所の裏から逃げた人達だ。大和田野先生は地面に寝て居られたので先生の言葉を伝えたのだが、体がきつゝいから此処でいゝと言はれたので其のまゝにして、学童らしい火傷で全身水ぶくれのした患者を担架にのせて山を下りた。これが大和田野先生にお会いした最後であつた。

歸つてから小母さんに、同宿の三人の学生の中一人位は駄目だろうと話したのだが、三年の安日君は其の日のうちに無事歸つて来た。級友の日高さんは翌日やつと歸つて来たが、喉に穴があいていて息が苦しそ

だ。数日後郷里へ向われたが——いまわの際には周囲の人達に御礼の言葉を送って従容として死に就かれたそうである。

翌日、伊良林小学校にも收容所が出来ていると聞いたので行つてみた。今村、西の両君は既に諫早の海軍病院に運ばれたということだ。恐らく委託生になつていた關係だろう。今村氏はひどい外傷を受けていたそうだ。彼がカメラを後生大事にいつも腰にくくりつけていたのを思い出す。フライトのある男だつたのに惜しいことをした。肥後君はやつと此処まで辿り着きはしたものの、運動場の片隅で死んでいたということである。

未だ所々燃え燻つている中を通つて大学に出掛ける。然し中は殆ど焼けてしまつてゐる。防空壕の中に角尾、高木、山根教授等が收容されていると聞いた。昼頃には諫早からトラックで握り飯とタクアンが沢山届いた。普通なら歓声をあげて飛びつく所なのだが、食べられる人が殆ど居ないので、勿体ないことだが腐らせてしまつた。

家族の人達が気遣つて探しに来初めたので、先ず学生の生死を調べることに着手した。生存者は教える程しかいない。情報が入るにつれて殖えはしたが、同時に死亡者の数も増して行つた。夕方頃だつたか、汽車が開通したので、軽傷者は郷里に帰り始めた。従つて元気で仿ける人の数は更に少なくなつてしまつた。

其頃久米の衛生隊が救援に来てくれたので、多少皆の顔に安堵の色が浮んだ。何しろ病院がやられたので救急道具さえ何一つ無いのだ——実際は放射能の障碍に対しては全く手のつけようもなかつたろうと思うが——。そのうちに高木教授が死なれたといふ報せが伝つた。重傷者が次々に死んで行く。何とも言いようのない悲痛な氣持だつた。藤原君が

ひどい骨折で参りそうだつたので、其の夜は彼の呻き声を聴きながら防空壕に泊つた。

三日目頃になると、山の上に居る人達を焼跡の建物に收容することになつた。奥君が夢遊病者の様にふら／＼しながら下りて来たが、後で死亡した。原田君が眼科の地下室に收容されたと聞いたので行つて見たが、既に冷くなつていた。殆んど傷は無いようだつたが。新名君が会いたがつていたよと誰か知らせてくれたのだが、生きては遂に会えなかつた。

其後本館の二階で死んだと聞いたので、せめて死顔でも見たいと思つてかけつけた。結婚したばかりの奥さんが傍で放心した様に坐つていた。煙草を欲しがつて死んだそうだ。それで毎年の原爆記念日には煙草を供えることにしている。玄關前の広場に材木を寄せ集めて来て、其の上に彼のなきがらを乗せ、奥さんと二人で火葬したが、あまりのことに涙も出なかつた。今思い出してもぞつとする。

彼は常々、自分は一人息子なので後継を造る為結婚したのだと語つていたが、確か奥さんは妊娠していた筈である。今、彼の妻と子供はどうしているであろうか。永井隆先生は顔に繻帯姿で活躍して居られた。さすが金鶏勳章組だけあつて、テキパキ仕事を進めて居られた。先生の言いつけで防空壕から薬品類を引つ張り出して一箇所に保管した。山根教授はお酒好きと聞いていたし、木戸先生から言われて、消毒用アルコールを薄めそれに注射用のブドウ糖液を加えて持つて行つた。先生は繻帯だらけで顔もよく分らない程だつた。有難う、あとで戴くよと云われたが、あのやかましい先生が大変元氣がなさそうに見えた。恐らく此の即製飲料も召上れずに昇天されたのではないかと思う。命によつて薬理

の祖父江教授を本河内にある佐野教授の宅まで担架で運んだ。途中下りて小便でもされたのに、後で死なれたと聞いて、いよ／＼誰が死ぬの生きるのか分らなくなつた。

時日が経つにつれて救助体制も幾らか整つては来たが、死亡者は殖える一方だつた。調教授が滑石に救護所を開設されたので、大学関係者も多数そちらの方に送られた。二人の息子さんを失い乍ら医療に従事された先生の胸中は何なものだつたらうか。毎朝螢茶屋から歩いて大学に行き、夜は燐光の燃える道を死骸につまづきながら帰る日々が続いた。主な仕事は死体の処理等の筋肉労働であつた。其の或る日、片淵に級友の園田さんを訪ねた。色々心残りがある様子だつたが、遂に最愛の新妻を残して死んだ。

これでもう一発来たら愈々最後だなと覚悟はきめていたが、終戦となり、遂に里心がついてしまつた。愛刀を肩にかついで、四日三晩かゝつて鹿児島我が家に辿り着いた。母は、死んだものと諦めて僕の写真を仏壇にかざつていた。父は、遺骨拾いに長崎へ旅立つていた。

友達のこと、学校のこと等気にはなつていたが、心身ともに虚脱状態だつたので家にじつとしていた。やつと十月、大村での授業再開に出頭して級友の動向が分つたようなわけである。死亡者三十五名で、生存者は僅かに三十二名となつてしまつた。今西君はあとになつてから防空壕の中で発見されたそうである。岩切君は五島君の世話になつて八月の末に時津で死んだとのこと、彼は犬の野球好きだつた。戦時中禁止されていた野球をこつそりやつて、当時の学生主事松下助教から大目玉を頂戴した話がある。今運動場に出て見ると所狭しと野球が盛んであるが、そ

の度に岩切君の黒い顔を思い浮べる。若し生存していたら、どんなに喜んで野球をやるだらうかと思うと可愛想な気がしてならない。

こうして丁度十年前の惨事を記憶を辿りながら綴つてみたが、時間的な点で多少正確を欠いているかも知れない。若しあの爆発が何秒か早かつたら、生死全く其の立場をかえていただらうと思うと、生き残つていゝ自分が未だに不思議な気がしてならない。死亡者の御冥福を心から祈らずにはいられない。

(当時学部四年 現辻村外科勤務)

原爆を顧みて

久野文次郎

思えばかの時我々は長崎医大の最高学年で九月には仮卒業の上軍医学校に行くことになつていた。そこでクラス七十数名はそれ／＼のグループに分れ、現在のインターンのように各科を廻りつゝ卒業試験をうけていた。私は調外科に廻つていた。

昭和二〇年八月九日、原爆投下の当日も、盛夏の候ではあつたが、夏休も返上して講義、実習が行われていた。当日の朝私は防空当直に當つていて、大学で眼を覚した。朝から暑い。九時頃であつたらうか、空襲警報が解除になつたので、外科の我々の控所に行くと、肥後、平井君などが見えていた。肥後とは久し振りである。というのは彼の家は鹿児島市

に於て空襲のため罹災し、父上と妹さんがこのために死亡されたので、一ヶ月以上帰省したばかりであつたから。それから私はこの日の午後手術予定になつていた筋炎クランケを受持たされたので、血液検査をしておかねばと思ひ、外科病棟に赴きメラランジュールを以てクランケの耳朶から血液を吸つていた。この時木戸助教授の一行が廻診に見え、やがて地下室に行かれた。私はメラランジュールを振つていた。

この時飛行機が急降下する時のような爆音がしたのではつと思つたが、何しろ空襲警報解除の後だつたので、友軍機かなと思つた。次いでよく知られているあの強烈な白い光を見た。この光を見て、何しろ全く経験のないことなので、「はて何だろう」と思つた次の瞬間には猛烈な爆風が来て、何かグリーンと全身を、特に頸部を撲られたような気がして、吹き飛ばされた。そして暫く意識を失つたらしい。「ハッ」と我に返ると、部屋の中といわず、外といわず、全く変貌し、破壊混乱の極みである。自分の手を見ると左手の第三指と第四指は僅に表皮一枚を残して、かろうじてぶら下り、骨が突出して出血がひどい。頭部特に後頭部も相当にやられているらしく、手をやると、ねつとりと血液がついて来る。採血していたクランケがどうなつたか明確な記憶がない。(後で聞いた所によると死亡した由)

とにかく足のふみ場もない程なので、坐ることも出来ない。何んとかして廊下に出た。そこに坐り、もはやこれまでと茲で命を終えようと思つた。学業半ばにこのようにして死ぬと思へばくやしかつた。しかし出血特に頭部からの出血が甚しかつたので必ず死ぬに違ひないと思つたわけである。そこら辺に散らばつてゐる紙切れを拾つて、流れる血潮を指

につけ、遺書をしたためた。

外を見ると浦上の街はもとより、山まで全く緑を失ひ、変貌してゐるので、これは広島に投下されたのと同じ新型爆弾とゆうやつだなと感じた。

坐つてゐると近くに火がメラメラと燃えて来る。このまゝ居れば茲で黒こげになることが明白になつたので、渾身の力を振りしぼつて裏の山に歩みを運んだ。沢山の人が山へ山へと歩いてゐた。浦上の街が凡て火を發しているためか熱風が吹き上げて来る。精神科の横で尾立と會つた。一級下の海江田君にも會つた。

山で大学の燃えるのを見乍ら死に度いと一念で登つた。空はあやしい紅に染りやがて暮れた。俄か雨が降るし、空には敵機がひつきりなしに飛んで来る。あたりには沢山の人々が避難して來ているのだが、何しろ暗くて定かでない。次々に子供が死ぬ。赤ん坊が死ぬ。母親の泣き叫ぶ声、祈りの声、私はこれらの声をきゝ乍ら畑の側のある横穴壕の中にいた。この夜中から出血が止つたので、これまで明らかに、あきらめていた生への執着が始つた。

「生きるかも知れない」と思ひ始めた。傷の痛みに一睡も出来ないままに夜は明けた。左手は出血を防ぐため手首をしぼり、指はシニルツエを破つて包んでゐるだけである。無性に水が欲しかつた。水！水！と叫んだ。このような時献身的に立仗いて呉れた人達の親切が骨身にしみたましく、明くれば、八月十日の太陽は全く変り果てた浦上を照らしてゐる。山も建物も皆焼けたぐれて、至る所に死体と傷者の群れ、まさに地獄の谷間である。何んとか歩けるので、大学の方へ山を下りる。角尾学長が箴

島助教教授や高橋講師などに囲まれておいでになるのに出会う。外傷は殆んどなく、只いつもの御元気があられないように見えた。「久野君に何か注射をしてやつたら」と申され、葡萄糖か何かの注射をして貰った。握り飯などすゝめられるが全く喉を通らない。汽缶場の側の横穴壕の所に着く。こゝで調先生、木戸助教教授に診て貰う。木戸助教教授は頭からガラスを取つたり、左手の手当をして下つた。この時皮膚一枚を以てぶら下つていた左手の第二・四指は永久に我が身から離れた。

こゝの壕の中に同僚の青木、宮城等の諸兄が打ちのめされた様な顔つきで、しかも火傷にたゞれて横になつていた。そして再び相見ることがなかつた。お互いに最後の別れなどは夢にも知らなかつた。こゝでソ聯の参戦、昨日の爆弾が原子爆弾だときいた。

私は午後の三時か四時頃であつたらうか、荒涼たる浦上から桜馬場の下宿を指して帰つた。二、三の人が制止したが、何んとしても畳の上に戻りたかつた。所々に水道管が破裂して水をふき出している。それらを飲み乍ら……。

その後二、三日経つて滑石の救護所に一週間ほど御世話になつた。こゝでは北郷君や手足の骨折に苦痛のひどい藤原君と一緒だつた。同室の人が血便など出してバタバタ死んでゆくので「赤痢だ」とゆうので隔離したり大変な騒ぎだつた。

父母はこゝまで来て下さつた。このような姿で両親に会うのは辛かつた。その愛の深さに感泣した。終戦の詔勅は母が買つて来て呉れた新聞により一部始終を拝読した。

八月十八日郷里である佐賀に帰つた。米軍の上陸のデマが飛び、この

救護所は解散することになつたためである。佐賀では県立病院に入院したが、こゝでも同室の原爆傷患者が数名死亡した。明日知れぬ露の命。まことに自分には何時その時が訪れるであろうなど思いつゝ過した。しかし命運つきず、外傷が大体治癒したのは十月二十五日であつた。前記の肥後は八月十日伊良林小学校で死亡したと聞く。まことに命運与せず、鹿児島から死にゝ帰つたようなものであつた。結局同級生七十数名中生残三十名である。

友等は如何にして命を終えたか、何しろあのような状況のこと故詳しし得ないものが多い。

不思議に命ながらえて、かの時に思いをいたすとまさに一場の悪夢の如くである。しかし語り合わんとしても友は答えず、自分の左手も旧に復する術もない。この事故に自分が以後いかなる思いをし、どんな生きかたをして来たか、それは又一つの物語であろうが別の機会にゆづり度い。

十年一昔とゆう。確に十年も経つと、原爆投下とゆう歴史的な大事件も一寸遠のいた感じである。以後戦場に於ては原爆は幸なるかな使用を見なかつた。第二次大戦終了後の世界の動きを見ても、広島、長崎に於ける原爆の炸裂が、如何に大きな意味を持つかがわかる。

人類は道徳的向上によつて戦争を止めるとゆう進み方をせず、おのが生み出した、極度に巨大な破壊力を持つた原子兵器の偉力を恐れ、根本的に戦争を回避せんとするに至つた。しかし理由はともあれ、戦争を国際間の諸問題解決の方法として使用しないことは慶賀すべきことであり、万難を排して人類はこの至上命題に成功しなければならぬ。成功すれば

栄光、失敗すれば破滅。是は今や万人の常識となつた。

長崎・広島の惨劇も、人類がこれを転機として、戦争絶滅に成功するならば、偉大なる犠牲として永久に人類の心の中に生きてゆくに違いない。そうあれかしと心から神に祈る。

(当時学部四年 現小児科勤務)

あの日の断片

西 森 一 正

病院に居てどうして助かつたのですか、その後身体に異状は起らないのですか等と問われる毎に、原爆を受けてからすつかり頭が悪くなつてねと持前の愚鈍を原爆のせいにしてしまつてゐる。然し頭のせいだけではない。あれから既に十年となる。色々の記憶が次第と断片勝ちとならうとしている。

大波止で空襲警報のため電車が停つた。下車して歩いてゐると何時の間にか衛生の大倉教授と一緒にゐた。先生には武道部長をしていただいていたし私が同部の世話役をしていた関係もあつて、時にお話しする機会もあつたが級友の殆んどは恐らく講義と口答試験以外には先生のお声に触れることはなかつたと思う。あの濃厚寡言の先生があの朝に限つて大波止から大学まで滔々と雄辯を奮いながら歩かれたのだから、

今考えても不思議である。この非常事態に当局は何故最も大切な学生を疎開させないかという要旨であつた。南方の戦線ではつゞ／＼戦略的転戦が行われ始めた頃だつたが待望の武道場が完成して道場開きをしたとき、部長の挨拶を御願ひしたら下書きを書いて来るよう云われたので下手な作文をお届けしておいたところ、式場で私の下書きをそのまま読んでしまわれたのは、赤面の至りであつたし、又その無頓着な姿に啞然としたものだつた。

あの朝病院正門のところでお別れしたのが十時前だと記憶している。登学してみると私のグルツベは橋本君を除いて皆集まつていた。卒業試験が皮ふ科の実施中で後には小内科が残つていただけだつた。皮ふ科の研究室を一部屋占拠してゐた私共のグルツベ七名は広島の惨状を見て帰学した角尾学長の報告を中心に、例によつて雑談に花を咲かせていた。「俺は確に太陽を利用した特殊爆弾だと思ふ」「いや傘形爆弾の一種だ」しかし一人は云つた「どうしても原子爆弾だ」と。ピカと来ればそれまでか、と云つてノートや参考書をその辺に投げ出して爆弾論議に熱中した。雑談は更に続いていた筈である。筈というのは丁度北村包彦教授が医専のポリクリの試験に出かけたので、常日頃不勉強の私がどうした間違ひか見学について行つたのである。これがグルツベで私一人助かり皆は恐らくあの部屋で運命の一瞬に見舞われることになつたものと思ふ。

北村教授の真後に立つてポリクリを眺めていた時、あの閃光をそして身を伏せる間もない爆風でふつ飛ばされたのだが、実際に気付いたのは部屋の中を飛ばされて行く瞬間だつたと思う、これでこの世とおさらばかと思ひあつたことが頭をかすめた。その次に意識を回復した時は真

暗い部屋の隅にたたきつけられて居り、手にはベト／＼と傷ついた人の血が触れ体は動けないまでに破壊されたもので圧しつけられている。息が出来難いのでやつとのことで屋上にはい上った。しかし屋上は落下する破片でとても立っては居れなかつたがこの時の空気ほど有難く美味しかつたことはない。爆風で眼鏡を失つたのと、爆煙のためはつきりは見えなかつたけれど外来本館の屋上から見渡した光景はただ凄惨というか、しばし夢の様に眺めていたけれども、やがて之が現実であることを知り慄然となつた。

北村教授と外来本館前でお会いした。早速救護隊を作れとのことだが然し何から手をつけてよいか方法も浮ばない。先生も顔面あたり血が吹き出している。後になつて思つたことだが、私の背中に三十何ヶの傷があることを考えるとあの時真後で先生に折重なつて飛ばされたのだから北村教授の蒙るべき破片を相当引き受けたことになるわけだ。

重傷者を引っぱり出しているうちに所々に火が出はじめたので次第に裏山の方に退避せざるを得なくなつた。裏の防空壕に非常時用のアルコールが貯蔵されていたので之を取りに行つたとき、グルツペの一人昇君に会つた。彼は外傷も少く比較的元気で、私について穴に入つた。ポインと来さうだな、など云いながら殆んど壊れた中から瓶詰教本を見付け、両ポケットに入れ、手にさげて山に上つた。もう既に山の斜面は重傷者が折重つて居り、髪は焼け落ち、衣類は裂けて殆んど身にまとうものもない有様で誰彼の区別は全く出来ない。片足を全く飛ばされた重傷の一人が突然私にとびつき、手からアルコールを奪うと私の制止する隙もなくグーと飲んでしまつた。勿論助かる見込のある患者ではなかつたけ

れど……。

穴弘法に着いた頃は基礎教室の炎上は絶頂に達し天をも焦す程であつた。無念の涙が傷口を沿い、ただ茫然とするのみであつた。

本館の下で尾立君に会つたとき傷を見せると大したことはないぞと元気づけてくれたが、側頭部の創は骨に達して居りここからの出血がなか／＼止まらない。遂に穴弘法の下で倒れてしまつた。古賀君ともう一人誰だつたか山の上まで私を連れ上げてくれた。外傷も少く元気だつた彼等だつたのに、下宿に着いて数日の後には不帰の客になつたのである。

敬愛する先生方、中でも小野助教授は私をこの大学に連れて来て下さつた同郷の先輩であり、何の相談にも乗つて下さつた方だつた。さし迫つた時勢の中でもほがらかに青春を謳歌した級友、これらの人々の面影が今は既に遙かになりつゝある。

この学び舎に真摯な勉学を続けている人々の中に今は亡き恩師の子息が、又級友の令弟が何人か居られる。その頃の又身の振りの余りにも故人に似て、過ぎし日の懐しさ傷ましさに目がしらの熱くなるのを覚えること屢々である。

(当時学部四年 現病理学教室勤務)

思 い 出

伊 藤 太 郎

昭和二十年七月下旬、空襲後使りのない両親の許に、道の尾駅から夜行に乗った私は、今度長崎に帰った時には、なつかしい長崎の街は、焼夷弾で灰になつて居るかも知れぬと考えた。

途中、広島で知人の家に一泊し、厚情に感謝しつつ、帰途再び訪れる約束をなし、子供達が河で嬉々として、水泳している様子を眺めながら広島を去つた。

八月九日、正午頃、私は郷里で、母の墓に手を合わせていた。

八月十一日、再び訪れた広島駅の駅頭で見たものは、傷ついた市民、軍人、死を免れて手を取りあつて泣いている人々であつた。

長崎も同様に原爆を被つた事を知つたのは、汽車が九州路に入り、佐賀をすぎた頃であつた。

八月十二日、長崎の町で見たものは、夥しい死人、負傷者、焼野に屍をやく多数の煙であつた。

やけた教室のあとに、一定の間隔を保つて、多数の頭蓋骨、手にとれば形がくずれるかと思われる灰と化して、これが先日まで親しかつた人々のかわりはてた姿であつた。

その後、ささやかな希望を抱いて、負傷者の收容せられている建物の中を、友を求めて、歩いたけれど、遂に会う事は出来なかつた。

又、傷が軽かつたと、幸運を喜んで帰郷した友も再び長崎に姿を見せなかつた。

八月中旬、終戦直後、ある私鉄の小さな駅に降り立つた私に、大学の様子を熱心に尋ねる中年の婦人があつた。

その人の長男も、当時大学に居り、家族の人々が連日長崎に、諫早に、その外負傷者の收容せられている処を、その人の姿を求めてさがして居られる事を知つた。

毎日くらくらになると、今まで休み毎にそうであつた様に、「お母さんただ今」と云つて、子供が帰つて来る様な気がして、毎日それを待つていきますと、半ばあきらめられながら、なおあきらめきれない様に語られたが、それから十年、子の親となり又、親としてのかなしきも知り、その時の婦人の、なくなられた学生達の御面親のかなしきが本當に分る様になつた。

又、当時、浦上の焼野を、子の、親の、姿を求めてさがして居られた人々を思い浮べると、今でもなお、深いかなしきと、強い憤りを感じる。

あれから十年、焼野にも花が咲き、家もつぎつぎと建ち、大学も再建され新装成り当時の面影は殆んど認められなくなつたが、今なお、浦上の地に立てば、なつかしい恩師、先輩、親友の元氣な御声がきこえて来る様な気がしてならない。

又、家族の方々の消え去る事の出来ないかなしきが、ひしひしと感ぜられる。

(当時学部三年 佐世保検疫所勤務)

原爆の思い出

—片山道生君をしのんで—

海江田芳春

早くも十年の歳月が経ってしまった今でも、原爆の声を聞く度に、多くの事件がまさ／＼と私の脳裏によみがえって来る。

学生の内では、一番被害の少なかつた吾々のクラスでも、二十名に近い死者を出したのだつたが、遺体も判らず、最後の様子さへ不明の人が大部分だつたかと思う。

偶然にも、片山道生君の遺体を処置した私は、その当時の模様を、限られた枚数で、記して置きたい。

当時、私のグルツペは大島、片山、賀来、梶原の諸兄と私の五人だつた。その朝、空襲警報が解けて、角尾学長の臨床講義も無事終り、吾々のボリクリだつた外科の予診室に行つたのは十時半を少し廻つて居た頃だつたらうか。私は前夜警報時に、足に針をさしたと云う女の予診をとりに始めて居た。グルツペの他の人々がどうして居たかを、はつきりと憶えて居ないのに、只片山君だけは、窓にもたれて居た姿を、はつきりと思ひ出す事が出来る。或は物凄い騒音と共に、烈しい爆風がやつて来て、反射的に窓を見たその時に見た、片山君の姿だつたのかも知れない。

爆風と騒音は物凄かつた。私は半ば吹き倒される様に、伏して居た。

一瞬の爆風と騒音の後には、暗黒と静寂。直撃弾による生埋めと思つた私は、体を動かしてみた。然し体は動く。「皆大丈夫か」と呼ぶ私の声に

「おう」と数人の声が出て、同時に何人か暗黒の中を移動し始めたらしい。誰かが私の体の上を這つて行く。それを知りながら、何故か私には「此の暗黒では何とも出来ない」と考ふる余裕があつた。

永く思われた暗黒が次第に明けた時、周囲を見渡した私は、その被害の凄さに驚きつゝも、飛び散つた靴をはいて建物の外に飛び出したが、更に私の驚きは倍加した。はるかに稲佐山迄の全ての物が完全につぶれ去つて、一面の原と化して居る。前日の大詔奉戴日に角尾学長が話された、広島の新爆弾の見聞が思い出される。右往左往する人々の姿は、完全な地獄図だつた。

早くも火を吹き出したグルンドを眺めつゝ、病院の裏山へ待避した時、ふと吾に返つて自分の着物を調べた私は、白衣の背中が血液で真赤に染つて居るのに気付いたが、自分では背中に負傷がないのを確かめると、暗黒の中で私の上を這つて行つた人のあるのを思い出した。しかし、その白衣も畑の中で出血のためか寒さを訴える負傷者にかけてやらなければならなかつた。附近は負傷者、火傷者で一杯だつたのだから。

やつと穴弘法の裏山にたどりついた時、元氣なクラスの人々を發見してほつとした。賀来さんの元氣な姿に会つたのもその時だつたが、同時に片山君の負傷したのも聞いた。片山君は暗黒の中を外科の診察室まで行き、賀来君の制止も聞かずに、窓の外に飛んだのだと云う。その時既に腹部に負傷して居たと云うのに。私の背中の血液はどうも片山君のものだつたらしい。

後になつて両側大腿部に三十数ヶの硝子の破片創に気付いた私は、暫く静養を余儀なくされたが、終戦となつた或る日、確か八月十八日だつ

たと思うが、大学への道を歩いて居た。長崎駅を過ぎてから、一人の大学生に話しかけられ、それが片山君の兄さんであるのを知つて驚いた。弟の安否を尋ねて九大から来られたのだと云う。

未だ帰宅しないと云う話に、やはり駄目だったのかと考へつゝ歩く道は遠かつた。大学に着いて、すぐ外科の診察室の外にある地下への階段を見たが既に何も無い。遺体は本館横に集めてあるとの事なので其処を探す事にした。時日が経過し、亦全身火傷を受けた遺体はなか／＼判別がつきにくい。しかし、やはり虫の知らせと云うのか、制服を着たゲートル姿の片山君を発見したのは、兄さんだった。検索の結果、ズボンのポケットから発見された五高の柏のマークの手拭は同君である事を決定的にした。八月上旬最後に帰省した時、持ち返つたものだと兄さんの話だった。

相談の結果、吾々も多くの人々を真似て、遺体を焼く事にした。高南病棟の高台へ上つた所の空地に安置し、周圍に四散する木材を集めて火をつけたのは午後一時過ぎだったと思う。完全に骨となつた午後五時頃迄、私は兄さんと元氣だった片山君の追想にふけりつゝ時を過した。

あり合せの石油罐の中におさまつてしまつた片山君をだきながら帰つて行かれた兄さんの心はどんなに重かつたかと、同情に堪えなかつた。

クラスの死亡者の内で、片山君の外には、大池未知生君が諫早の病院で死亡したのを、伝え聞いたのみで、他は何れも不確実な情報のみだった。限られた紙数も超過したので、今はなき諸兄の御冥福を祈つて筆をおく。

(当時学部三年 現大阪大学医学部産婦人科勤務)

原 爆

川 野 正 七

原爆による学生の被害の詳細は未だに不明である。当時の書類が殆んど烏有に歸したのであるから無理もない。巻末に附した名簿はまだ／＼修正の余地があるものと思われる。併し、被害当時の状況は生存者の記録や談話から推測することが出来る。

当時医学部の最高学年であつた学部四年生は既に卒業試験も終つてインターンのやうな格好で各科で実習中であつた。従つてその科の位置によつて被害の程度も異つたが、全部で三十六名の死亡者を出している。当日病院に居た者の総数は不明であるが、その約半数が死亡したものと思われる。

学部三年も皆グルツペに別れてポリクリ実習中であつたから学四と同様の運命に遭つたが死亡者数はもつと少く、判明しているものだけで十五名である。当日の出席者が少かつたからでなく、外来の時刻であつたので原爆から一番遠い外来病棟に居たものが多かつた為である。他のコンクリート建の病棟の蔭に當つていたので放射能による被害が少く、爆風による外傷が主であつた。但し、内科外来のやうに比較的高い位置で窓が爆心に向いている処では放射能による被害も少くなかつた。鉄筋コンクリートであつた為に火災の起つたのが遅く、火傷による死亡は少かつたようである。

それに反して基礎教室の建物は一部を除いては皆木造建築であつたので、爆発と同時に崩壊し、直ぐに火災が発生し、五分とたゞぬ間に基礎

教室全体が天に沖する火柱と化した。学部一年二年は共に授業中であつた。大部分が建物の下敷となつて生き乍ら火葬され、僅かに遅れ出た少数の学生も、数日内にその避難先でそれ／＼息を引き取つた。当日の登校者で一名の生存者も残っていない。

専門部一、二年も同じ運命を辿つた。二年生は衛生の講義が休講であつたために全滅を免れたが、それでも百十名の死亡者を出し、一年生は生化学講義中出席者全員が教室員と共に全滅の悲運を見た。之も判明しているだけで、百六十六名に達する。

専門部三年は卒業試験に當つていたので病院内に居た関係上、被爆の事情は学部四、三年と同様であつた。死者二十三名と伝えられる。

以上で判る通り、人命を救うことを学んでいた医科学生在籍者七九七名中の四九九名という多数が一発の爆弾によつて命を奪われたことは史上に例を見ない事であつて原爆というものの怖ろしさ、戦争というものの残酷さを物語つて余りある。直接の加害者である米国（というより関係当事者）間接の加害者である日本の軍指導者、ひいては戦争そのものを呪いたくなるが、又翻つて果して之程の犠牲を払わねばならなかつたかと問うて見ると甚だ疑問なきを得ない。第一に八月九日という日は平素ならば暑中休暇中である。夏休み返上の方針であつたとしても、学長の判断次第では犠牲を少くする為の休校或は疎開授業をすることも出来た事情にあつたことは九大の例を見ても明らかである。

広島の惨状を眼のあたりに見て来た角尾学長が、新型爆弾の威力に徴して直ちにその対策を講ずる代りに「一億玉砕」精神に拍車をかけ、「学生諸君の覚悟」を促したことは当時の空気を反映したのとは言え、人

命軽視のそしりを免れ得ず、学長としての責任を問われても仕方があるまい。併しその学長も転に殉じて他界された今となつては責めるにも責められない。それにしても原爆の一週間前には大学に直撃弾を受けて死亡者さえ出し、ついその前日の八日には全学生に広島を目撃談を聞かせたばかりである。「長崎よいとこ花の街。八月九日灰の街。」という不気味な歌さえ伝えられていた矢先である。状況の危急なことを判断して独断で疎開していた学生は皆助かり、忠実に出席していた学生が受難したということは皮肉というよりも不当である。愛児を奪われた父兄が学校当局を怨んだのも無理からぬことである。

九死に一生を得た学生はコンクリート建の病院に居た者ばかりである。基礎教室も同じ耐火耐震建築であつたならと思うのは返らぬ愚痴というものであろうか。現在建てられつゝあるコンクリートの新校舎を見つゝ感慨新なものがある。

我々は学友が為さんと欲して為し得なかつた医学による奉仕を彼等に代つて果す責務がある訳である。一冊の医書を手に入れるにも苦念惨澹し、大豆を嚙り豆粕に餓えをしのぎ、日曜もなく祭日もなく、夏休みさえも返上して勉強をし苦勞をした甲斐もなく、原爆の犠牲となつて散つた学友達の無念さを我々以上に知る者は無い筈である。我々が彼等の素志を継ぎ彼等の願いを果すのでなかつたら、口に冥福を唱えても無意味であろう。亡き学友諸君よ、我々の怠惰を赦してくれ給え。そして君達の分まで研究に治療に活躍出来るよう励まし祈つてくれ給え。それが我々の葬い合戦である筈だから。（当時学部三年 現江村外科勤務）

原爆日記

佐々木 隆

米粒大のガラス片が今だに頭から出る毎に当時の記憶が雑然と思いかんで来るが、此の度ベンをとるにあたって十年前の日記帳とゆうにはあまりにも粗末なメモ、しかも一昨年六月の熊本の大洪水で水びたしになつたメモをとり出してみた。

四・二〇 入営延期の書類書留にて発送

四・二二 茂木での五高会警報発令の為延期

四・二三 天井外し作業

四・二六 十一時長崎駅に爆弾

五・九 今日一日一回も警報なし

六・二二 転員、学生による当直制度開始

七・一 義勇隊結成式（九時）。医専入学式

七・四 渡り廊下の屋根こわし作業

七・一二 本日より警報中でも講義続行

八・一 十一時四十分婦人科、耳鼻科、古屋野外科、生化学に爆弾

八・六 今日より電車動く。本日より講義再開、午後医専の殉転

者三名の校葬

日増しに切迫している空気がひし／＼と感じられるこうした状態下に、今にして思えば最後の大詔奉戴日を迎えたのであつた。

八日 学長東京より帰学。広島の奇妙な爆弾の話を全学一同校庭で聞く。

しかし吾々が立つている校庭が、そしてそこから見渡せる限りのところが二十二時間後に同じ運命に爆されようとは一体誰が予測し得たろうか？

九日 十一時すぎ新型爆弾？西山を廻つて夕方帰りつく。

古屋野外科外来で閃光、熱風、暗黒。皆思い思いの方角に散つて行く。僕も夢遊病者の様にあてもなく黙々と歩いていると後から上つて来た女学生に額から血が出ていると注意されてはじめて現実の世界にかえた様な気がした。挺身隊で三菱の工場にいたとのこと。うちが穴弘法にあつて母が一人であるからとに角一服していらつしやいと言われて息をきらし乍ら後について坂道をかけ上つたが家の跡片もない。いくら4Dの近眼鏡を吹きとばされたとはいえ、見えない筈はないとあたりを見まわしても一軒の家もなく、褐色の丘がづくばかりである。下方遙か城山から山里町とおぼしき方角から火の手があがつている。病院はと見下すと何事も無い。あゝよかつた。基礎はと目をこらしたが残念ながらこの目でははつきりとは位置が分らない。時計は動いている。十二時十分だ。

片淵に下宿している者四、五人一団となり浦上の神学校の裏に出るとさかんに燃えている。黒い雨が降り出した。ハンカチ、手拭い、ゲートルは救いを求める人々の止血に使つてしまつて既がない。看護婦が吾々一行にモンペをくれたのでそれで繙帯や三角巾を作り乍ら西山の水源地へ通ずる本道に出ると、家族の安否を気ずかつて「城山は？」「大橋は？」

と叫び続け乍ら坂道をかけ降りて来る長中、瓊浦、商業などの生徒に次から次へと出合う。こちら「西山は？」「片淵は？」と同じ思いで問いかえず。のどがたまらなくかわいて来るが、お互に水をのむなどはげまし乍ら夕刻下宿に辿りついた。夜高木教授、国房教授、一級上の藤原君を訪ねたが何れも消息不明。硝子の破片がささっているので仰臥することも枕をすることも出来ぬ。室の隅にもたれて寝た。

十日 三十七度八分。朝高木夫人、続いて藤原夫人来訪、藤原君をさがし出す。県下の警防団が大学に援助に来る。

目を覚すと少し熱があるので一日寝ていようと思つてゐるところに藤原君の奥さんを探しに行くから連れて行つてくれと頼まれ、水筒一つ持つて昨日通つた道を再び大学へ。八月の激しい日照りの下、知人の行方を求める連呼が山にこだまする以外は全く静寂、昨日までの工場の沈黙はその巨体と共に更に一層の無気味さを加える。突然「見よ東海の空明けて」と調子外れの歌声が精神科の裏の山手から聞える。あちこちで低いうめき声。露出した背中には白い膏葉が一面に塗られている。それらの人を励ましつゝ「藤原さん、藤原君」と連呼すること数十回、やつと下の谷間から応答があつた。奥さんが何か叫んだが鹿兎島辯なので僕には分らない。と転がる様にかげ降りて行つた。早速病院に引返しそこに居あわせた乗馬部の石川さんと担架を持つて迎えに行つた。手と目の不自由な藤原君を昨夜から世話していた足をやられた影浦内科の岩永と言ふ看護婦の方を先にと藤原君は言つたが、重症の方と言ふことで彼女を残して担架を二人でかついだが、倒れた家や崩れた石垣で足場が悪いとは言ふものゝそれにしても余りに腰がふらつき握力がなくなつてい

るのに我ながら驚いた。

十一日 角尾、高木、国房夫人と午後から大学へ。軍隊が後片づけの応援に来てゐる。疲労困憊す。

角尾先生、高木先生は外科の東側崖下の防空壕内に。国房先生は皮膚科の地下室に、藤原さんも崖下の防空壕に。患者の苦しみはますます強く、看護する方も多忙と疲労とで神経がとがつて来る。薬理のある助手が水を飲ませてくれと執拗にせがむので、やかましくて他の患者は甚だ迷惑。どこかに隔離しようかとの案も出たが、防空壕の一番奥なのでどうにも手がつかない。「皆さんやかましいでしようが、あとしばらく辛棒して下さい。あの人も今夜までには静かになるでしようから」と医者をして言わしめる程どちらもどうにもならない情況があちこちに繰り展げられていた。死と闘うこの一帯に元気な蚊が出はじめた。蠅はまだ居ない。

十二日 一日休息する。

十三日 高木先生宅を訪ねる。先生死去（十一日夜七時）とのこと、道の尾の大学分院へ。夜十二時すぎ帰る。

道の尾に大学の患者收容所が出来ており、夕方からそちらへ出かけ、吾々もそこで今夜は泊めてもらつつもりだったが、患者だけでも既に收容しきれぬ程なので仕方なく夜道を片淵までとぼく／＼と帰る。大橋から小川町にかけて沿道にはあちこちに死体を焼く火が見えるがもうその臭気にも馴れてしまつた。

十四日 朝三十九度二分、夜七度四分、市役所に高木先生の死亡届出す。

十五日 無条件降伏？国房先生重篤、川野君のうちに寄る。元気で治療にあたつてゐる由。

十六日 午前四時国房先生死去。大音寺に葬儀を頼みに行く。園田君午後六時四十分死去。終列車で出発。

消毒、軟膏塗布、ズルフオンアミド剤、解熱、強心、鎮痛、ビタミンといった平凡な治療で看護していた先生方、友人が続々と死亡。今朝から僕も下痢気味になつたので、赤痢にでもなつておつてたゞでさえい人手をとる様なことになつてはと思ひ熊本に帰るためまだ心残りの多い長崎ではあつたが急遽十一時の終列車に乗りこんだ。

(当時学部三年 熊本大学体質医学研究生理学衛生学研究所勤務)

日高和郎君の書簡

一、まえがき

瀬戸 口 孝 夫

日高和郎君と私との交友の期間は、長崎医科大学入学の昭和十七年九月より僅か三年足らずの短いものであつたが、互に意気投合し肝胆相照らす、文字通り刎頸の交はりであつた。

苦難の時、悲歎の時、何かにつけて彼との交友の思出の数々が私を鼓

舞し、激励し、慰めてくれる。しかも彼の思想や生活態度の一部は、完全に私の理想とするところであり、彼の精神は妙なる靈魂の糧の如く、私の精神を養い、私の生命の中に今も尙鼓動を続けている。彼は私にとり永遠の友である。

こゝに掲げた三通の書簡は、彼が昭和十九年十一月以来病を得て帰郷している私に与えたものの一部である。文中にあるケルネルの一詩とは、翌年二月、彼が病中に読み精神療法として試みたと言う白隠の夜船閑話を送つてくれた御礼にと、私が当時病床で読んでいたハンス・ヴォルハート編の詩集の中から撰んで贈つたもので、彼は私の訳の一部を彼なりに改めて示している。当時の毎日に激化する空襲のため、九州の西と南を結ぶ交通路も障碍されて、四月二十三日附のものが彼よりの最後の便りとなつたのである。

書簡の文中到るところに見られるように、実に彼は自然の中に自己の生活を没入させ、自然と一体とならんとする自然への深い愛と高い理想とに燃えていた。そして彼はこの理想を目指して絶えず努力し実践せんとする人であつた。かくて自然こそは、彼にとつて希望と理想を与え、病弱な肉体に勇氣と生氣とを吹込み、靈魂を呼び起す唯一のものであつた。彼は人生を、芸術を、医学を、そして総て一切を自然と人間との關係より出発させたのである。

「自分は一日一日より良くならんとして生活している。近頃街へ出るのが嫌になつた。何処か山奥の寺にでも自炊してもつと生活を徹底させてゆきたい」と何時か真剣に洩らしたことがあつたが、常に高いものに憧れ、より偉大ならんがために精神的に自己を精進してゆくことこそ

彼の生活の根底をなしていた。そしてそのために、彼は世俗的なこと、従つて現実的なことには餘り執着を持たなかつた。彼の精神の奥には光り輝く理想の世界がひらけていた。それは単に観念的に現実を遊離した形而上の世界ではなかつた。飽くまでも現実の中に自己を徹底させて而も辯証法的に現実を超越せんとする、いはゆる東洋的無の境地であつた。これが彼の理想の世界であつたのである。それ故に、常に雑談を好み快活そうに見える彼が、一方、自から静寂と孤独を求め、芭蕉や良寛や一茶に親しまんとしたのも実にこのためであつた。この限りに於いて、彼は単なるイデアリストでもなくロマンチストでもなく、むしろ詠わざる東洋的詩人であつた。

最後に彼との交友の数々の思出の中より、一つだけを附記することを許していただきたい。

昭和十九年の秋、敗戦の影次第に濃く防空警報は絶えず出て餘裕のない日が多かつたが、ある晴れ渡つた一日、私は彼と青木武君との三人で、青木君の家から炊事道具を携えて甌岩へ登つた。途中谷川の瀬で炊事を済ませ、野菊の咲き乱れた木立の間の細途を辿り、やがてあたり一面薄の穂の白く波のようにざわめいている高原の頂上に着いた。遮る雲もなく白熱した太陽の眩しい射るような光線の下に立ち、透明な秋の大気に融けこむかのような紺碧の海と、青々と重疊した山々の下に白くくつきりと帯のように続く海岸線を俯下しながら、私共は戦争の苛酷さも忘れて自然の持つ雄大な美景を心ゆくばかり味つた。その時、日高君が藁の上に寝転びながら母校の寮歌を声高らかに歌い「あゝ、若しここにゲーテかバイロンの詩集を繙いている女性があつたなら、自分は無条件にプ

ロポーズするであろう」と絶叫した言葉は、私の胸に永久に忘れ得ない青春の感激を残している。

蓋し、今にして思えば、私共の学生時代の不幸なる記憶の中より浮び上る唯一の悦楽の思い出であつた。

二、彼の書簡

昭和十九年十二月八日附のもの

蜜柑の香のたゞよう暖い長崎にも寒い冬が訪れて来た。ノートをとるペンを握る手がかぢかんでくる位になりました。臨講にもスチームが入るようになったのです。外気の冷たさを想像して下さい。

先日の御葉書ありがたく拝見、兄の生活態度の偉大さに触れ得たようで嬉しかつた。その後の経過は如何ですか。こんなことを尋ねるのは愚なのです。帰郷して旬日をやつと過ぎた位でベシユベルデが去るのは早すぎると思うのです。尋ねたいのは故郷の山河の生活に真に融け込んで心身一如の日々を送っているか否かです。……略……

試験は二十二日から二十六日迄でその後は一月七日迄休暇です。この休暇もかく時局が緊迫して大々的空襲でもあれば何時解消するかも分らない。二十二日、二十三日が法医で二十六日が医学の心理学です。やつとノートの整理が出来たところです。兄は今度の試験は延期した方が良いのではないかと思う。試験など何時でも受けられるものです。寒い冬にわざ／＼試験を受けに来ることは静養の根本精神に反するものと思う。故郷に帰つてやつと生活に落付いたと思つた瞬間に、長崎での生活が走馬燈の如く回想せられるであろう。しかしそれと共に、学友と学業に対する無限の思慕を、意慾を力強く感じて「病身」と云うことに強い淋し

さを感じているようなことは、西郷精神の漲っている南の国に生を受け
た兄にはないことゝ思う。しかし色々の生活の波調をヅルヒマツヘンし
たところに偉大が生まれるのではないかと思つている。苦しみを敢て消
すために快楽を視する必要は全くないと思う。苦しみは苦しみ、楽しみ
は楽しみ、ここに本当の人間の姿があり、本当の美と真があるのではあ
るまいか。

ツベルケルバチレンは飽くまでもバチレンと視するのが良いと思う。
敢て否定するには及ばないのです。バチレンの本態を細菌学的にはな
く、同じく時間と空間とを占める一存在として見極める時、何か科学を
超越したあるひらめきを感じはしないか。甘酒のあの麴の「カビ」を愛
し、バチレンを嫌うところに人間の淋しさがあるのではあるまいか。

病中僕は良寛や一茶や白隠等の書物に接する機会を得た。彼等の生活
を覗ひ知ることも、我々科学徒殊に医学徒には大切ではあるまいか。理
屈を述べることは僕は不得手なのです。僕は颯々たる白雲に、青空に、
單純な自然に、生活の真意を求めてゆく医学徒なのです。

僕は今週内科のポリクリだった。T先生に鍛われた。K先生の指導の
方がより人間的で曖昧さがあるように思われる。T先生の機械論的方法
は人間の自然への対立的考察に立つてはじめて成立するのだ。しかしこ
れでは医学は飽くまでバチレンに嘲弄されるのではあるまいか。

今一步の向上、僕は日々これを求めて精進している。兄よ、如何。

十二月八日 大詔奉戴日の記念日に皇国の發展を祈念しつゝ兄の恢
復を祈つてペンを擱く

昭和二十年三月三日附のもの

久しぶりに貴兄の元氣なお便りに接し貴兄の面目躍如たるものを想起
しました。

実は十二月試験終了後にペンをとつて「時局」と「安静治療」との矛
盾に心を痛めている様子であつた貴兄に、杉正俊著「郷愁記」を哲学
的にでなく純粹に医学的に批判して「絶対安静とは肉体と精神の安静」
であること、心身一如である故同時的ならざるを得ないこと、即ち結論
として郷愁記は医学的に見て肉体の安静は保ち得ても精神は安静どころ
か心痛そのものなる故、郷愁記の療法は医学的に認められない、とい
う意味の便りを書いたが自己反省をやつてみて内心忸怩たるものがあつた
のでそのまゝにしておいて、「夜船閑話」の方が僕の云うことを明瞭に語
つてくれるものと思つて送つた次第でした。

その後肥満した由喜んでおります。僕も二月二十日より十日間帰郷し
て三月二日に帰崎した次第でした。風邪で身体に何んとなく元氣がな
かつたのでしばらく帰省静養して、恢復したので帰崎した。その時貴兄の
便りが僕の机の上にあつたので直ちに拝見しました。

学校の方は相変わらずです。三月一杯で講義が終り四月より卒業試験の
予定になつております。本日その試験の日割、グループの組合せも決定
しました。未だノートの整理も出来ない有様で、大学の試験としてかく
も忙しく追つかげられるようでは学の蘊奥どころか末梢の方も理解出来
ない。しかし学も学そのものために存在する時代は過去のことだつた。
今こそ学は醜敵を撃ち破るメトードとして初めてその生命を賦活される
ように感じています。しかもこれが正しいと信じています。

大学新聞は読んでいますか、なつかしいですね。苛烈な時局の中に何

んとなく心の奥底を流れる曖昧さをこの新聞から味うことが出来ます。出陣学徒の手記、杏児、台務理作氏や柳田謙十郎氏の論説、その他の記事、如何なる生活にしる、その生活に徹し得て初めて人の心琴に触れ得る内容を持ち得るものです。僕達はこの徹すると言うことに缺けているので不平と不満に苦しんでいるものと思つています。無の境地です。色即是空、空即是色の世界です。これが理想の世界です。この世界は東洋人にして初めて可能になつた世界です。

下宿の窓辺の梅が咲き始めた。自然こそ虚偽のない美しい世界と思つて眺めています。ケルネルの詩を思ひ浮べつゝ。

貴兄の名訳は再三読みかえました。結論は、西洋の詩は西洋の言葉で理解するのが一番味いがある。美しい韻律が破壊され易いからです。浪漫派に属する彼の詩は美しい。俗事にあくせくとして日々を送つてゐる我々には、彼の詩により我々の世界と別個に美しい世界の展開を啓示してくれるようです。満員電車の吊革にぶらさがつてかく思いました。国破れて山河云々の言葉も想起しました。ケルネルの詩の肯定はたゞちに祖国愛に連なるものです。詩の深遠さもここにそのαとωがあるように思つています。拙訳笑覧。

(一) うましくも汝は行く恋人の腕に

いとも幸多き男子ぞ。

吾は行く唯一人、されど共にあり

吾を幸はふものと。

(二) そは碧なす聖なる空

百花療乱の野中

淋しくも夜鶯の囀る

ふりし夜半の森。

(三) そは悠々去り又来たる雲

湧き出づる水のせゝらぎ

波濤なす緑の芽生え

それと身軽くも舞ふ鳥。

(四) 華奢な婦人の腕に抱かれて

汝は憩ふ香ぐはしき薔薇の唇に。

唯一人吾は行く、黄昏るゝ涼風に

マントひるがへし。

(五) 道行く人の影みえず

鳥は木影に憩ふとき

吾は行く暗き夜途を

明るき夢路たどりつゝ。

最後に自重自愛一日も早く帰崎あらんことを祈る……以下略……

四月二十七日附のもの

先日の便りは餘り取急いだもので用件ばかりで本当に失礼しました。

丁度難関中の難関小児科の試験を目前に控えていたので悪しからず御許

し下さい。

其の後調子は如何ですか。気候も良くなりましたので日一日と元氣も

出てくることゝ思つています。大学の運動場の一角に立つている楠の若

葉が無限の希望を秘めて萌え始めた。澄んだ青空に自然のみが——造化

の神のみが出し得る黄金色に輝いている。運動場にはクロローバが緑の床

をのべている。日夜激化する空襲の中にも自然はその美しさを静かに保つてゐる。そして悪戦苦闘する人間に無限のあるものを抱かせてくれるようです。「国破れて山河なし」、私はこの大学の一角に人の目につかず静かにしかも恐らく大学の歴史をその年輪に刻み込んでいる楠の若葉に、この「国破れて山河なし」の一句をしみじくと味つた。それと同時にこの若葉は無限の希望を与えてくれる。無限への憧憬の過程のさ中に真と善と美があるように思えます。医学もそうだと思つています。治療に限界があると観じた時そこには退歩があるのみです。「限界」を通りこし無限なるものへと撓まず精進を続けるところに発見があるのです。自然は人間の懐に抱かれます。同時に人間も自然の懐の中に横たはりたいたいのです。かくして神秘は人間が撓まず精進するところに、無限への活動の中に啓示されるように思えます。コッホでもエールリツヒでも、皆これらの人々はかゝる類型の中に含めても良い人たちばかりです。勿論僕もこの類型に入り得べく努力しているのですが、タートよりデンケンが先行する傾向があつて宜しくないと思つています。……以下略

× × ×

以上三通の手紙を一部割愛して掲載致しました。被爆当時の生々しい記録によれば、彼は両親をはじめ今まで世話になつた人々に深謝した後、従容として瞑目したとあります。死に臨んでの誠実なる彼の面目躍如たるものが偲ばれます。

遙かに在天の君の靈魂の冥福を祈る。

(当時学部三年、現在 解剖学第一教室勤務)

その日お会いした方

高橋 徹 郎

「安らかに眠つて下さい、あやまちは二度と繰り返しませんから」は広島に出来た原爆死亡者の慰霊碑に刻まれた碑文だと言う。一体誰が誰に向つて言つている言葉かさつぱり理解出来ない。忍び難きを忍んで、誰がいかなる誤ちを仕出かしたのか識らないと私が譲歩しても、唯これだけの事はいつでもでも言えるだろう。あの日瞬時にして散つた十方の方々の魂魄に、「安らかに眠られてたまるか」と、思えば思う程感情の昂ぶりを抑え得ない。こう言う馬鹿げたものが長崎に出来なかつた事は私にとつてせめてもの慰めである。

当日私最後の最後を見届けた方の数は凡そ二十人、その中でも最も思い出したくなくて却つて一番先に脳裡によみがえつて来る幾たりかの人が居るけれども、之が小説でも脚本でもなければ更に筆にするにはあまりにもむごすぎて瞑目のほかはない。

× × ×

此度被爆十年祈念のための出版に当り、その日お会いして遂にそのまゝ二度とお目にかゝれなくなつた学内三、四の方々のその日の思い出と私の目に見た一端を書かして頂きます。

当日爆弾投下の約二十分前から学内に居なかつた私は、諸先生、先輩、同友に被爆後お会いした数が少く御遺族に対して詳しい御報告の出来ない事を残念に思います。

昭和二十年八月九日第一時限は故角尾先生の臨床講義で之が先生の最後の御講義となりました。嘗て学長室に於て、真夏の夕まぐれ、行水でもなさつたのか素裸に禪一本と言う学長先生から勉強とはこうするものだと教えて頂いてから十年あまり夢の如く無益無食に終りました。

その後昼迄の時間私のグルツベは皮ふ科の北村包彦先生の外来であつたのが、丁度その日確か専門部学生の試験のためだつたか我々は半ば自由の状態となり、此の時間中、午後二時迄二時間あまりを利用して長手から入る山の中へ出かけたのが遇然の逃避となつた。

十時三十七分かの長崎発列車が、少し遅れて浦上駅を発車したのは四十分を過ぎたかも知れない。被爆は道の尾を過ぎて長手に至る間であつた。目を射た白色閃光から約一秒後の爆風で日除けは飛び、便所の戸はそのまゝ吹き倒れ座席は傾き、その中で人が床の上を這い廻つていたのを記憶する。人々は原爆を知らず、すべて汽車が爆撃されたものと思つた。現在では万人承知の原子雲は真夏の昼近くの晴れ渡つた上空へギラ／＼と輝きながら物凄く速さでグ／＼上昇して行つた。人々はボカ／＼として見ている。たゞそれだけで何事もなかつた。三、四分の後に天日を覆うてたそれがその様に、火の粉を混じた黒煙が東南に当る山の端から押し寄せて来る迄は。

此時はじめて攻撃されたのが長崎でどうやら新型爆弾らしいと言う声を聞いたが実感としてはさつぱり分り様がなかつた。殆んど小一時間も過ぎた頃第一の避難者が三菱のトラックに乗つて街道に現れたが乗つていたのは四、五名で何れも動員学徒の焼けたゞれた姿で、恐らくその運転手が救つて脱出したのであろう。彼も同じ様に大きな火傷を負つてい

た。皆口をきくのも大儀らしく見えただけどもこの人達に依つて大凡の事を知り一散に長崎へと走つた。

その地点からは鉄道を帰るより山を越えた方が大分近いと言ふので山へ入つて迷ひ込み困却したが、その山道で初めての大学関係の方に会つたのは一、二年の頃から病理の教室でよく面白い話を聞かされた鼻の下に小さい髯を生やしていた上手な画工さんでした。途中で折つたらしく青竹を杖にして、頭はいつも蓬髪にして居られた様に思ひますが、その髪は灰を被り肩から頬へ傷つき衣服の一部はボロボロになつて「何もかも滅茶苦茶にやられた。きつうしてたまらん」と言つてトボ／＼と行かれた姿を思い出す。その頃から傷ついた避難者が続々とつゞき長崎の大半が一瞬にしてつぶれた事を知つた。

峠を越えて漸く恐らくは川平と言う部落のあたりと思われる地点迄来た時はすでに午後二時はあつたと思ふけれども、旧道の尾街道は防諜のためか警戒厳しく一切の交通を許さずその先如何なる経路を通つたのかはつきり分らないけれども、それから先はさながらの地獄絵で、迷える霊に対してもその様を書く事は出来ない。しかしこの目で見、この手で引き出し、この背に負い、その日の一番長い時間をそのあたりで過したのである。

次に会つた学内の人は附属医専の学生二人で一人は比較的元気だつたがもう一人の方はすでに立つ事が出来なかつた。会つた場所は現在の本原三丁目の少し北側であつたがその人達は瑩茶屋の人で、特に悪い方の人は「どうしても死ぬ迄に帰り着きたい」と言うのが、その後「もう之以上頑張れない」と言う迄の唯一の言葉だつた。ゲートルを解いてしつ

かり背中に縛り一人を支えてその人達が今迄逃げて来た道を逆戻りしたがるで虫の這う様にもどかしい速度であつた。畑の中にそのまゝ焼けた南瓜を腹につめ込み一心に帰つたけれども浦上天主堂の後の岡に辿りついた時はすでに夕日は落ちかゝつていた。そしてそこで遂にその人は背中に縛られている事而努力が尽きて了つたので降ろした。

丁度その時近い所で赤ん坊が泣いているのに気がついた。場所はすぐ傍の畑の中で、畑の手入れの最中に被爆したらしい母児であつた。お母さんはすでにこときれ、赤ん坊はそのおつばいになすがつて泣いていた。沢山の遺体の中を通つて来たけれども何とも言えない気持になつて、恐らく皆同じ気持になつたのであろう、どちらからともなくそこへ坐り込んで了つた。

しかしその頃にはあちこちに担架を持つた無傷の救護班が動いている姿も見えてお互に安堵の気持でその人達と別れたが別れ際に握つたその人の脈は恐らく螢茶屋への念いを叶えさせなかつたのではなからうか。

それから私は暮色の漸く濃くなつた岡の斜面を降りて行つたが大学の運動場の向ふ側に七八人の人がいてしきりに誰かを呼んでいた。少しずつ近付くに連れてそれは高木純五郎先生を探している事が分つた。更に降りると「オーイ、此処だ、高木はこゝだ」と言う先生の御声が聞かれた。しかし岡の私には聞えるが運動場の人達には聞えない。先生は天主堂の南側の崖下を流れる小川の底に倒れて居られた。私はその場から声の限り運動場に呼ばわつた。それがやつと通じて先生がその中の一人の背中に負はれるのを見弘法へ向つた。その後外人墓地から西坂の山手を経て東へ迂廻しお諏訪の山から市内へ入つたのは九時過ぎて県庁から

発した火が中島川を挟んで必死に防がれている最中だつた。そしてその後一ヶ月間その焼け跡では毎日毎日焼け残りの材木を積んで原子病の犠牲者を焼いたのである。

× × ×

„Ja, meinem Herzen am nächsten sind jetzt die Verlorenen, die von denen ich weiss, dass ich sie nicht retten werde.“

(Hans Carossa)

(当時学部三年 現解剖学教室勤務)

八月九日

田 中 稔

『光陰矢の如し』月日の流れるのは速いものであの無慙な生地獄に九死に一生を得てからもう十年にもなる。当時南国の長崎は眩しい夏の日光の下に、海は碧く、山々の緑は濃く、夾竹桃、カンナ等今を盛りと咲き乱れていた。

昭和二十年八月九日。早朝発せられた空襲警報も解除となり、警戒警報に入つたので一安心して各自の仕事にたずさわつていた。大学では講義、病院では診療が始められた。私は医学部三年で角尾学長の講義終了後、永井先生の放射線学の時間であつたが一週間前の爆撃で配電故障のため休講となり南講堂で手巻煙草をふかしながら親友今福、布引両君と

六日の広島爆撃の話をしていた。

『あの新型爆弾は物凄く威力だそうさ。一瞬にして広島全市がすつ飛んだと言うことだ』

『原子爆弾が完成されたのか知ら。』

『次に長崎がやられなければよいがな。』

下宿の昼食に帰るのも少し早いのでこんな会話をしていた時、突然飛行機が急降下接近して来るような唸音が聞えた。『そら来た皆んな伏せろ』私は怒鳴った。その瞬間大爆音と共に周囲は暗黒となり、気付いた時は重いものが私の背に積み重なっていた。

かろうじて頭を擡げ左手で頰を撫でて見るとぬるつとする。直感的に「血だ、やられたこれは至近弾に違いない」と思った。それと同時に自分の生命のあることを再認識し、逸早く脱出しなければ焼死の浮目に逢わねばならぬと考え、全力を出して脱出せんと試みたがどうしても左足が抜けないので遂に靴を犠牲にして這い出した。辺りは次第に薄明くなつて来た。腕時計は十一時二分で止つていた。今迄すぐ傍で話合つていた親友の姿は見えない。よべども返答はない。やられたのか、それとも先に逃げたのだろうか、気に懸けながら屋外に向つて飛び出した。

講堂と云わず廊下と云わず到る処白壁は落ち、床は抜け、窓硝子は総て飛散し、机椅子等は完全に分解され、直前まで浦上の丘に聳え立つていたクリーム色の美しい医大附属病院も、鉄筋コンクリートの外部のみの哀れな姿になつてしまつた。

起きたり転んだりしながら裏庭に出て見ると、蒙古の黄塵万丈のそれと似て周囲がよく見えない。先程まで青々と繁つていた草木も、芝生も、

鳥もすべて吹飛んで赤土が露出している。木造建築は潰され、石塀は屏風倒しになり、「助けて呉れ」の悲鳴があつちこつちから聞え、血塗磨のようになつて脱出した人、火傷で皮を剥かれて赤蛙のようになつた人、衣類は吹き飛ばされて真裸体で死亡している人、無数の死体が到る所にごろ／＼して目目を覆わんばかりの残忍な光景、將に地獄の景が展開された。

医専学生に肩を貸しつゝ裏山に登り瑩茶屋方面に逃れたが、途中教箇所に出火事が起つていた。山腹に沿う路は前も後も敗残兵のような多くの人々が長い列を作つていた。山の上から街を見下すとあつちこつちに火災が起りガスタンは爆発し赤い火、青い火が天を衝いて大きな坍塌と化していた。浦上天主堂の高塔は無慙にも中途から折れ、下宿のあつた上野町もすでに猛火に包まれてしまつた。

其の夜は諏訪神社の高台から炎々と燃え、何時消えるとも知らぬ長崎の街を脚下に見て実に感慨無量であつた。幸いにしてあのむごい火傷は負わなかつたが頭部、頰面、左前膊等に計十数箇中の硝子傷を受けたので有合わせの白布で繃帯をし、原爆第一夜を諏訪神社境内の防空壕に明したが、色々とお世話になつた諸先生や学友の顔が走馬燈の如く脳裡を掠めてまんじりともする事が出来なかつた。

(当時学部三年 現東京都職員明石病院勤務)

Phoenix

新田 一郎

あれから十年。悪夢にしても余りにも痛ましいあの日の事を想い出し
ては、今でも私は慄然たらざるを得ないのである。

文字通り、青天の霹靂、突如の一大閃光、巨大なる爆圧、そのあとは
呪われた業火の如く浦上一帯は一晚中燃え続けた。

昭和二十年八月九日午前十一時二分。

私は精神科のポリクリがないので、中講堂で学友と談笑していた。と、
異様な爆音を聞いた。危い。伏せんとした瞬間、ピカッ、両手を当てが
つた眼に鋭い閃光が射し込んだ。アツと思う間に、物凄目に見えない
大きな力が、私の五体を床に叩きつけた。同時に鉄筋の建物自体がダツ
ダツダツダツと激しく振動した。山鳴の如き響のこだましたあとは、
鼓膜を聳して暫く何物も聞えない。

何分経過しただろう。恐らく十分とは経っていない筈だ。やつとの事
で抜け出して、裏山に駆け上つて振りかえつた私は呆然自失した。見て
いる眼の前で我が愛する大学は、我が敬愛措かざる恩師、学友は、一瞬
にして一団の炎と化しているではないか。

原子雲と名附けられる巨大な雲を仰ぎ見、浦上一帯を舐め尽した紅蓮
の焰を眺めて、奈落にでも突落されたかのような絶望を抱いて私は金比
羅山の中腹でぶつ倒れてしまった。

今にして想えば呪われた第二次世界大戦の最後の日。長崎浦上の聖地

に燃え上つた大いなる燔祭。それは余りにも痛ましいものだった。犠牲
という言葉で片附けるには、それは余りにも大き過ぎた。

此の事実を知る人は余りにも少い。私達、幸いにして九死に一生を得
た者は、この原爆の恐怖に就いてもつとく声の大いにしなくてはなら
ない。原爆は愚か水爆までが話題になつている現今、科学の悪用は人類
を破滅に導くという事を唱えたい。長崎の浦上の空に炸裂した原爆をも
つて永久の終止符としたいものである。

一度は完全に廃墟と化した長崎浦上原頭から私達の手でフェニックス
を飛びたせたいものだ。

(当時学部三年 大阪市医学部産婦人科勤務)

追憶

秦野 滋

今年もあのグピロが丘に例年の様に沢山の人が集まり、花を擦げ、頭
を垂れ、當時を回想して涙を流した。

既に早や十年の歳月が過ぎ、年々同じ八月九日に集まる人々の数に変
りはある、想いは変らず、大学を見下す丘の一隅に立てられた慰霊
碑も亦、宿命の地獄の業火に散華した千名に垂んとする人々の無量の思
いを声なく語っている様に思われた。

この十年の間に当時の記憶も大分薄らいで来てしまつたが、奇しくも

其の日、朝から長崎を離れてあの凄絶極らない地獄絵の世界から免かれることが出来た私にとつては、身を以てその渦中に巻き込まれることもなかつたためか、尙更当時の情景は生ま／＼しく脳裏に焼きついて、私の生命のある限り一生涯忘れることは出来ないであらう。

昭和二十年八月九日、いつもの様にゲートルをつけ、教練服を着たまゝ寝ていた私は六時頃眼を覺した。七時頃警戒警報が発令になった。朝からカン／＼照りつける恨めしい様な良い天気。

私は前々から思い乍ら出来なかつた衣類や医学書類の疎開を、慢然と、実に只慢然と思ひ立つた。前日の八月八日の大詔奉戴日に角尾学長から広島の様子を聞き、大学も近く鹿島中学に疎開する予定で、学生も何時でも動ける様に身の廻りを整理して置く様……と云う話も確かにその時慢然と疎開する気持の底にあつた。

庭の片隅の形ばかりの防空壕に埋めて置いたのを掘り出し、郷里の家が薬局なので持つて来ていたビタカンファー、ロジノン、モヒ類をも石油箱二ツに詰め直して、之も買出し用に持つて来ていた自転車に積み、自転車のハンドルに今考えても妙な話であるが、靴類を短靴やら、ズツク靴やら全部ブラ下げて七時半頃、山里町北部にあつた下宿を出た。自転車を押し乍ら大橋を通り住吉を過ぎ、丁度、今も残っている道の尾の手前の六地藏前に差し掛つた時、空襲警報が出た。

私は道端に自転車を立て、地藏さんの傍らに腰を下して考えた。さてどうしたものか。毎日の様に出ている空襲警報である。直ぐ部署に着かなければならないが、今から帰つても病院迄は四十分は掛る。直ぐ解除になるかも知れないし、十時からポリクリが始つても私達は小児科で、

四年生が予診をとつた残りがないと私達は新患の予診がとれない。配給のぞみをキセルに詰め一服し終つて、折角もう此処迄来たのだからと云う気持が先きに立つて、慢然とサボルことに決め、目的地の時津村に向つて又自転車を押しに行つた。

この時が私の運命の一つの岐路だつたのであるが、それから数時間も経たぬ後に、あの凄惨な情景が繰り上げられようとは神ならぬ身の誰が予測し得たであらう。

長崎の東北方一里半程も離れている時津村に着いたのは十時頃だつたと思う。

原子爆弾が落ちた時、私は大学の艇庫の鍵を預けてあり、以前から時々行つたことのある堀口さんと云う家の戸外に居た。

殆ど雲一つないと云つてよい真昼の空が、突然、稲妻が閃く様に一瞬輝やき渡つた。何か判らないが胸を衝く予感があつて、思わず地上に伏せた。何事も無い。爆音も聞えない。数秒、十数秒たつて顔を上げようとした時、だしぬけに耳もとに雷が落ちた様な物凄い空が引き裂ける様な爆発音がし、頭の上をサーツと風が吹いて行つた。

見ている前で艇庫がグシャリと潰れ、田や島の肥料小屋が長与村の上へ順ぐりにパタ／＼と倒れて行つた。

ふと気がつくとき長崎の方の空に真白な入道雲が見る／＼と拡がつて大きくなつて行くのが見えた。微かな爆音がし、高い／＼上空を銀色に光る点の様なB29が一機頭上に見えた。

人々が集つてガヤ／＼云う。誰も何が何やら全然見当がつかない。兎に角長崎の方から風が吹いて来て、長崎に面している方の窓ガラスが皆

割れたのだから、長崎に何事かあつたに違いない。私は昼食を食べて直ぐ長崎に帰ることにした。出掛ける用意をしている所に村の人が私を呼びに来た。

何先生と云う開業医の家にトラックで怪我人が運ばれて来ているから直ぐ来て呉れと云う。行つて見ると、マグロでも積む様にゴロ／＼重ねられた怪我人がトラックの上でうめき叫んでいる。聞くと三菱兵器工場に居つた人達らしい。何先生は道の尾に往診して留守だったが間もなく帰つて来られたが、丁度帰省して居られた古屋野外科出身の亀井先生も馳けつけられて、私も一緒に手伝い時間の経つのも忘れて治療に当つた。次々に怪我人が運んで来られるので、長崎に戻ることも出来ない。

皮膚がべろ／＼に剥げ、焼けたぶれた人々が多く、男か女か判らないのもあり、口々に浦上のガスタンクに直撃弾が命中して破裂したのだと云つていた。勿論中には既にこきれたものもあり、息のあるものは例外なく、水、水を呉れ、と叫んでいた。

長崎の上空の白い雲は黄色くなり、褐色となり、やがて空一面とすぐろくなつて来て、夕暮の様な一種異様な景観を呈して来た。

七時頃と思うが、兎に角、大学に行こうと思つて、負傷者の一部を万行寺と云う寺に移し、自転車で飛び出した。道の尾附近に行く迄に、皮膚の剥けた人相も判らない人や、怪我をした人が、杖にすがり、或はよろ／＼とよろめき乍らゾロ／＼来るのに何度も会つた。聞くと住吉から先きは家が倒れて道を塞ぎ、道路も何も判らない様になつているから逆も長崎には行けないと云う。怪我人達には時津村の万行寺に行く様に話して、道の尾駈を過ぎて見て驚いた。

右は稲佐山の山続きから、左側は穴弘法の山続き迄谷の様になつている。城山から浦上一帯一面火の海である。黒褐色の煙りは長崎上空一帯を覆いその情景は何とも形容の言葉がない。之では稲佐山の峯づたいにでも行かなければ迎も長崎に入れないと思つて断念し、再び時津に帰り徹夜で負傷者の治療に当つた。電燈はなく、提灯のあかりで縫合したり、副木を当てたりした。

十日の朝、空が白みかけるのを待つて、今度は長与村の駅附近から浦上水源地に抜ける山道を通つて、今の昭和町附近に出、旧神学校の方から浦上天主堂の方へ降りて来た。長与からの山道は以前騎道班に入つて居て、よく遠乗りに来た道であつたが、其の途中、峠から長崎の街、浦上一帯を見渡した時は呆然として言葉も出ない程のショックを受けた。真先に見える筈の天主堂がない。大学の基礎の建物が全然ない。只一面の焼野が原……。長崎の港迄何一つさえぎるものもない。

浦上の天主堂を過ぎ、大学のグラウンドを通り、菓専の水タンクの傍で故永井教授に会つた。頭に繃帯をして居られ、ソ聯の参戦を報せて頂いた。学生も何人か居た。道の途中も、大学に着いてからも、焼けたぶれた屍体がゴロ／＼転つていた。不思議に涙も出なかつた。

救急袋から出して附近の人達の手当をして病院の方に行つた。

神学校から降りて来る時、大学の裏山から穴弘法にかけて、無教に点々と白いものが鳥の中に見えていたが、近付いて見ると、皆それは医局員、学生、看護婦達がイモ鳥に倒れている姿であつた。小児科の裏の入口にも学生が五六人倒れてをり、佐野教授が色々世話して居られた。高瀬教授も元気に馳け廻つて居られた。外科の裏に行くとき古屋野教授が居

られ、兎に角裏山の怪我人を降す様に云われて、丁度居合せた耳鼻科の江上講師と一緒に担架で、頭から顔から一面火傷をして居られた石崎助教授を先ず見つけ出して降した。それから裏山に上り降りるを幾度び繰返したか判らない。知らぬ間に暗くなり、其の夜は外科の附近の建物の中で寝たが、蠍蚊と、興奮とで、殆ど眠れなかつた。翌十一日も同様に過し、怪我人運びと水運びをしている中に、学部四年の石川武彦氏に会い、時津村に同伴した。石神氏も時津村に辿りついて私達と一緒になつた。

其後は時津と大学と行つたり来たりし、同じ下宿だつた二年の津和恵吉君が長手から連絡して来て連れに行つたが、彼は其後血便を出し始めて十七日に逝つた。病理教室から屋根を破つて這い出し、一旦は元氣の様であつたが、ロゼノン、カンフル等の手当の甲斐もなく、本堂の一隅で永遠の眠りに就いた。

万行寺の本堂一杯になつた患者は、逆も一日に一度のつけ替えも出来ない程で、真夜中に提灯のあかりの中を高熱のために脳症を起し、うめき、叫び、果ては血だらけの繻帯のまゝペラ／＼に剝げた顔を眼鼻口だけあけて油ガゼを当てた患者、二人も三人もフラ／＼とさまよい歩き、這い廻る有様は、これが現世のものとは到底思えない程の凄惨極りないものであつた。朝になると、鐘撞堂の下に幾つも／＼屍体が並べられる日が続いた。殆ど徹夜が続き生きている身も辛かつた。

ラデオも無く、新聞も来ず、デマは乱れとび、終戦を確実に知つたのは十七日だつた。

二十何日か、道の尾の岩屋倶楽部に居られた角尾学長が亡くなられたのを人伝てに聞いた。張りつめていた気持が、桶のタガを外した様にガ

タ／＼に崩れた様な気がした。悄然と汽車に乗つた。

郷里の仙台迄一步でも近付きたい気持から、デツキにブラ下り、機関車の前部に乗りにして、小田原で兵隊さんに握飯を御馳走になつた外は、殆ど飲まず食わずで四晩五日目の夜遅く家に辿り着いた。靴はバク／＼に破れて縄で巻き、シャツとは名ばかり袖はなく、四合瓶の栓のないのを細縄でく／＼つてぶら下げて学生乞食そのまゝの格好だつた。

帰つて一週間か、十日程経つて少し気持が落付いてから、色々なことを考え、前途に希望も光明も見失い、再び大学に戻ることはあるまいと思つても、仲々諦めがつかなかつた。放心と虚脱の幾週かを郷里で過した。

十一月頃迄、遠い故もあつて大学の様子は全然判らなかつた。その頃同級の松崎から講義が始つていると云う報せがあり、私は直ぐ長崎に出て来て、級友の消息を始めて詳しく知つた。原爆直後長崎に居る間は誰がどうなつたものやら一寸も判らなかつた。併し級友の半分も出て来ては居なかつた。十二月に入り休暇になつて家に帰つた。そして翌二十一年二月、大村海軍病院に大学が移つたことを知り、再度西下した。

その前、当時は食糧事情を理由に大学間の転学を認める旨が新聞に出て、周囲から近くの東北大学に転学する様すゝめられたが、廃校になつたのなら兎も角、母校がある上は逆も自分だけ転学する気持などなれなかつた。この時も私の運命の一つの岐路だつたのであろう。

やがて大村での学生生活が始つた。生き残つた者は皆集つた。講義、ポリクリ、新しい希望に満ちた生活が始つた。全寮制度の様で、環境も申し分がなかつた。夜は死んだ級友の憶い出話が幾度び繰り返された

ことか。平和な日々が続き、四月に入り休暇になった。大部分の学生は帰省したが、私は遠いので寮に残った。

そこに降つて湧いた様に突然に諫早海軍病院への移転問題が起つたのである。私達学生には事情は判らなかつたが、追出される破目になつたことだけは確かだつた。学生は当時残つていたのは鴨打君と私だけだつたが、愈々移ることに決定して、四月十八日トラツクに米、畳、毛布などを大村病院から借りて各科医局員と一緒に初めて諫早海軍病院に下検分と先発隊を兼ねて来て見て驚いた。

全く病院とは名ばかりの幽霊屋敷である。寝台の形をしたものはあつてもマツトは引き裂かれ藁だけが散乱し、電燈のコードも、硝子も全然ない。大村の環境設備が比較的良かっただけに、皆悲憤慷慨やる方もなかつた。併し致し方もなく、設営して整理することになり、私は其の晩から板の間に畳を敷いて泊り込んだ。各科からは交替で整理に来ることに決り、二十人位宛来ては方々の片付けや整理をしたが、始めは釜も鍋もなく大きな海軍のヤカンで飯を炊いたりした。後では杉田老人が来てやつて呉れたが、それ迄の苦勞は大抵なことではなかつた。

木戸、荒木、原、柴田助教授、薬専の横山教授や、赴任されたばかりの中沢教授等も泊り込まれて色々指揮をされていた。

五月十一日より診療開始と云うことも決つて私達の作業は一段と拍車をかけられた。近くの村から作業員が連日四五十人も来たが、事務当局の責任者は誰も来ず、夕方賃金を支払う段になつて長崎に電話したり、転業紹介所と交渉したり、色々心配させられたが、併しどうにかこうにか診療開始の段取りに漕ぎつけられることが出来た時は、貧弱な汚い病

院ではあつたが、それはそれなりに床を水で洗い流しなどして、兎に角一応の形が出来て嬉しかつた。

私達は学生本部を作つて、集まる学生や、新入生の宿舍の世話をしていたが、当時の新入生は陸士や海兵出身者が多く、落付く間も無く大村病院や、元の航空隊跡に机や椅子、各科の荷物の運搬に連日トラツクで五回も六回も往復し、在学生と共に実によく働いて呉れた。あの当時は全く全学生が一丸となつて各科の医局員の指示の下に精魂を尽して協力したものであつた。

確か五月二日と記憶するが、別掲の檄文を今は亡き級友の渡辺信近君と稿を練り、諫早分院の玄関に張り出して学生の奮起と協力を願つたのであつたが、当時の悲壮な意気込みは今になつても尙偲ばれてならない。

其後は毎年の様に浦上の焼跡の整理が学生の奉仕作業によりなされ、遂に二十五年に至り待望の浦上に復帰出来たのであつたが、原爆後十年の今日、漸くにして大学本来の面目を取戻して、嘗つて待ち望んだ真に明るい将来が確実に現実に近いものとなり、更に希望に満ちた毎日を過しつゝある事を思うと、只々感慨無量、万感胸に迫るものがある。

当時、自分が怪我一つせずに生き残り、大学の裏山を担架を持つて馳け廻つた頃は、自分の身が無事だつたことが呻き叫んでいる人々に対して申訳ない気持で一杯であつたが、其の後のことを振り返ると、生き残つた私にも何か残された務めがあつたのであろうし、又今後もそうであらうと思つている。

あたら春秋に富む身を浦上の野をくれないに染めて散華した先輩、学

友の魂の平安を心から祈り、永久の平和をこい願つて追想の筆を搦きたいと思ふ。

(昭和三十年八月十五日記 当時学部三年 現調外科勤務)

檄

新入学及び在学の全学生諸君

我々が愛する母校長崎医科大学は昨年八月九日午前十一時二分、忘るべからざる原子爆弾の一瞬の閃光と共に、荒涼たる廢墟と化し、角尾前学長以下教授学生其他千名に垂んとする尊き生命を失いました。

呆然たる虚脱的絶望の中に起つた悲痛なる敗戦と打続く社会的大混乱の渦中に彷徨いつゝも、我々の母校は敢然として再建の努力を継続して来たのであります。

本年二月から大村市に一時安住の地を見出し、希望に満ちた勉学も僅かに二ヶ月、依然たる官僚の頑迷と、些々たる個人的感情のために突如たる移転命令の儘に、当時無人の廢屋たる本院に四月末日を期して移らざるを得ませんでした。是が非に破れ、感情が理性を圧伏する悲しむべき運命が、今尙我々を左右しているのであります。

祖国敗亡の今日、敗戦の窮乏如何に甚だしく、再建の障害如何に数多くとも我々の務めは、我が眼にて視、我が耳にて聞いたあの凄惨極りない地獄図より高らかに、我々の不死鳥を飛ばせることでなければなりません。精神と肉体に於けるバーバリズムによつて敗れた我々は、各自の

道義的自覚の上に立つて、創業の苦しみの中に創造の歎びを求め、自主的に明るく美しい、そして正しい自由で満ちた大学を創るために努力することが、死んで行つた先輩、学友に対する我々の唯一の饒けであり責任であると思ひます。

戦時たると戦後たるを問はず、如何に困窮混沌の時代、如何に夢幻極り無き世相の中にあつても真理は遂に真理であつて、一点一劃も異なる所はありません。

人間社会に於て、無私誠実が尊いものであるならば、我々の夫れを大学のために捧げましょう。努力精進が尊いものであるならば、我々のそれを大学のために捧げましょう。我々の精神と肉体に於ける最も善きもの、最も美しきものを、各々が大学の中に結集して一日も早く過去を凌いで立派なものに仕上げようではありませんか。戦時中、祖国に対して若き情熱と力の全てを捧げたと同様に、今此処に漸く安住の地を得、新らしき希望に燃えて立上らんとする母校の再建に、再び夫れを捧げようではありませんか。

勿論、学生の本分は勉学であります。而もその勉学は生涯を通じての全人間的努力であり、精進でなければなりません。殊に医師たるべき我々の学生々活はその本来の第一コースであつて、單なる受動的聽講者、資格獲得のための受験者ではありません。

大学の最重要なる構成員として大学本来の機能を十二分に發揮するために、我々の責任と自覚の重要性を改めて深く認識して欲しいと思ひます。

殊に新入学の諸君は大学の現状に就て失望や落胆を感ずることでしょう。

う。併し祖国敗戦の現状が如何に悲しむべきものであつてもそれが冷厳なる事実たるに等しく、我々の大学も現在最も不幸なる現実の中に立つているのであります。

至難なる再建の業を此処迄漕ぎつづけるだけでも、全学を挙げての美しき協同と偉大な犠牲的精神が如何に大きく仿いたことでありましようか。此の機に当り、我々は新入学の諸君に対しても衷心よりの協力を期待するものであります。

大学は真理探究の殿堂であり、我々を俟つて為さるべきことは眼前に山積してあります。

全学の学生諸君、心を協せ、手を執り合つて共に学び、共に学びましょう。明るく美しく、そして正しい自由に満ちた我々の長崎医科大学の建設のために。

昭和二十一年五月二日

長崎医科大学学生本部

責任者 学四

秦野

滋

良明の靈に捧ぐ

母 加 藤 梓

原爆落下して早くも十年の歳月は流れ今日八月九日を迎え思ひは亦も新になり、あの悲惨なりし当時を偲び実に感慨無量の思ひです。

過し拾年の九日の朝、警報発令され十時近く漸く出掛ける良明を、その朝に限り玄關先まで見送り、「では行つて参ります。」「用心なき

い」とお互に手を振り合い、にっこりと笑い乍らもう一度ふり返り送り出したのが此の世のお別になるとは………一時間後にはあの恐しき原爆の為に、只一塊の真黒な灰と変り果て、いとしの良明の亡き骸とは只々啞然として涙さえ出す事を知らず、暫し呆然として漸く吾に返り、余りにもひどい此の惨劇に身動きさえも出来ぬ思ひでした。

父なき後は杖とも頼みし良明もわづかに廿四才を一期として此の世を去り、余りにも儂き短い一生悲しむと共に母は命の限り永久に忘れきれない淋しい思ひです。

今は只冥福を祈りつゝ静かに過して居ります。

終りに望み此の残酷極る態に直面した今は、只平和を祈ると共に三度かくも悲惨なる原爆の禁止を世の人々と共に大いに叫び度いものと思ひます。

十年祭を迎えて八月九日

故加藤良明

(当時学部二年)

長男淳一のことば

父 田 中 淳 直

あれから十年の間、一日として淳一の事を想わぬ日は無かつたのに、夢に見たのは如何して斯うも少なかつた事だらう。

被爆現場の病理学教室焼跡に、うづ高き瓦の間に頭蓋骨が幾つとなく

出て居り、大きな骨格の学生の焼姿や、ベン跡も判然と読む事の出来る焼けたノートの紙片の散り／＼に飛んで居る痛ましい光景と云い、被爆と共に即死した人、倒壊した教室の下敷となつた人、痛手を被つて尙懸命の脱出を計つた人等。火が廻りやがて鎮火する迄の残酷、悲痛の状況を想像して、ただ／＼合掌冥福を祈り、分骨を頂き山上の慰霊塔に参拝を終り、あの混雑の汽車を彼杵で降り、三里の道を家内と徒歩で悲痛に疲れ切つた重い脚を引ずり乍ら我家に辿り着いたのは夜の二時半であつた。

所が二学期が始まるや、九大医学部二年で淳一が佐高時代の親友松田一夫氏より、当日淳一は、百崎、藤井の二氏と、被爆直後教室を脱出、何れかの方向に避難の途中、先ず百崎氏が耳が聞えなくなり、他の二人に、俺に構わず逃げて呉れと云われたのが、最期だつたらしく、行を続けるうち、淳一が突然倒れ後藤氏が驚き馳けよつた時には既に息を引取つて居たとの事。

斯くて後藤氏は有田の自宅に帰つて亡くなられ、藤井氏の事は詳かでないが、同じ運命を辿られた事と思われ。之は長大田中通敏氏の言で、高校以来同クラスである関係上信を置いてよいと思ふとの手紙をお貰いしたが之の田中氏は大学被爆を聞いて出崎、業火の鎮まるのを待つて病院横穴に逃避されたのに会い、以上の事実を聞き得て後、有田駅迄後藤氏を送り届けた人である。

其より幾日か経つて、次男を淳一の下宿迄荷物受取りに寄越した処、下宿で実は淳一を火葬したから遺骨受取りに本原町山中迄、直ぐ来て呉れとの警防団員の知らせがあつたのを、具合が悪くて到頭行かずに済まなかつたと云つた相で、私は再び出崎本原町一带を尋ね探して見たが遂

に判らず実に残念に耐えなかつた。其も之も未だ昨日の出来事の様であるのに、早十年の年月を重ね、此の間世界の情勢も著しく變つて来た。彼の憎むべき原爆更には水爆に因つて起る惨禍の如何に恐るべきものであり、事に因つては全人類の絶滅すらも考えられる様になり、原水爆に對する世界の關心は頓に昂まり来り、其の全面的禁止さえ叫ばれる今日幸にも其が実現せられ併せて永遠の世界平和がもたらされるならば全人類の欲び之にしくはないと思う。

私共は茲に未だ嘗て無き原爆の残酷なる犠牲となり終戦間近にして篤学の諸教授と共に、燃ゆる希望を抱き乍ら若くしてあの静かなる学園に敢なくも散つた数多くの学生、生徒達の御霊を慰むる為に現に我大学に後進の指導の任に当られつゝある諸先生の一層の御尽力に由つて國の力に於て大学の完全復興を見る日の一日も早からん事を切にこれ願うものである。

故田中淳一 (当時学部二年)

原爆十周年に際して

服 卷 光 子

生者必滅の世の習いとは云いながら、我子に先だたれる程、悲しいことがあるであろうか。

二男勝之は原爆の爲めに尊い生命を一瞬にしてうばい去られた。しか

もその死に方のむごたらしい事、筆舌に尽されぬ有様を見て失神してしまつたのである。病氣もせず丸々と肥え、潑刺として勉強中の青年、殊に来月は卒業という間際の出来事である。(戦時中故、一学期早めて卒業させらるゝ事になつてた)

一瞬の間に何万と云う屍の山を築いた此の世ながらの生地獄であつた。

この惨事の三日目に、私は三男清を連れて行つたが、爆心地浦上は一軒の家もなく、勝之の学んだ医大も姿を消していた。糸山の奥様とあてもなく狂気の如く我子をさがし歩き、ようやくにしてお昼頃地下室の暗い土の上のところがつたまま、まだ生きて居た勝之にめぐり合つた時の嬉しさ、只涙にむせぶばかりであつたが、それも東の間次第くにおとろえて、遂に動かなくなり冷たくなつてしまつた。

悲嘆は怨恨にそして悲憤に交り原爆を落したアメリカ人を突刺してハツ裂きにして自分も死にたいと思つた程である。果ては戦争さえなかつたなら死んで居なかつたらうにと思えば軍人がうらめしく天皇陛下までもうらみ、我と我身を海深く沈めてしまつた。

狂つている私の側に勝之は何事もなかつたかのように、まことに安らかに泰然自寂として眠つて居る。「大聖釈迦牟尼世尊でも、生死の掟は免れ給わぬではありませんか」と静かに教えてくれるようであつた。

私はいつもおきかせ下さる貞包先生の御法話をふと思ひ浮べた。「苦しみは慾より出でて身を悩まし……」と御仏前でおよみになつた事を思い出した。やつぱり私は我子の愛慾におぼれている、其為めに苦しみの海に沈んで居るのだらう。此の事実が若し全く知らぬ他人の子供だつたら、こんな苦しい悲しい思ひも起るまい、何と迷の深い私であらうと

も思えて来ていつの間にかやらお念仏申させて頂いた。

この原爆で親を失ひ子を失ひ家を失つて、私以上に苦しい思ひをして居らるゝお方々も沢山ありであらう。広い世界に日本に限つて二度までも原爆を受け剩え水爆までも蒙らねばならぬとはよくよくの因縁に由ることであらう。

近來世界平和運動などお祭りさわぎのように各所で行われては居るものゝその内容に至つては種々複雑なものがかくされていたりするようであるが、この苦々しい實際の体験者同志が結束して再びこんな惨事が人類の上におこらぬような新たな因縁を作り出して行くべきだと思ふ。

げにやこの世に親子という不思議の因縁を結び、愛別離苦のおもい深く、怨むまじき人を恨み、悲しむまじき身を歎きて、恩愛の絆たちがたく苦しみの海に沈む私である。

孔子様もその子鯉魚に別れては悲しみの火を胸に焚き、白樂天も病中に三才の幼児を失ひ、枕辺に残る薬をみて、なげき悲しまれたと云う事である。

世の中を思ふも苦し思はじと

思ふも身には思ひなりけり (玉葉集)

うば玉の闇の現はさだかなる

夢にいくらもまさらざりけり (源氏物語)

よしさらば思ひ出でじと思へども

涙は絶えぬ袖の上かな (新千載集)

実に愛別離苦は万人共通の思ひである。

原爆を落した人も鬼畜ではなからう、西洋人といえ、やはり仏性を持

つ人間にちがいない。何と理由をつけてみても善い事をしたと思うまい。必ずや呵責の責苦に遇うべく自ら蒔いた因は自ら刈り取るべき日が来るに違いない。月日は流れてもう十年も経つた。伝えきくところによれば原爆を落したアメリカ人は其後、修道院で懺悔の生活をして居らるゝと云う事である。

自分の悪かつた事を悔い、神仏の御前に御詫びするという事は何と尊い事であろう、其の宗教的なお姿が目の前に見えるようである。其尊い人を私は鬼畜とすらみ、のゝしつたが今更お恥かしい。殺すも殺さるゝも深い因縁あればこそである。敵と思つた人こそ、そのまゝ法の友であつた。お互に許し、はげまし合つて今後世界に平和な日暮しが永遠に続くようつとめたいものである。

勝之は、大正十二年九月、関東大震災の時に生れ、昭和二十年八月、原爆で亡くなつた。

生れつき健康で、兄弟仲むつまじく、一度も喧嘩をしたことはなかつた。学校へ行つても競技会へ行つても、いつも両親を喜ばせて居た。

親の御恩もさる事ながら、私にとつては子の御恩も大変大きいものであつた。子を持つて知る子の恩とでもいふのであろう。

村雲幼稚園、佐賀師範附属校、佐賀中学、佐賀高等学校、長崎医大と順調なコースを進んだ。彼は佐高卒業後は京大へゆき、哲学を学びたいと言つていたが、父はそれに反対し、とう／＼医科に入れてしまつた。彼が京大の西田幾太郎先生に私淑して居たことは死後彼の日記を見てわかつた。こんなに哲学が好きであつたのに本人の思い通りなぞ京都へ出

さなかつたらうか。京都は原爆も落されず、戦時中も実に平和なところであつたのに、と愚痴るのも人間の悲しさである。

当時は毎日空襲がつづいた。八月六日広島に新型爆弾が落ちたとはいが「被害は軽微」とのラヂオ報告のみで、遠方ではあるし実状をつぶさに知る由もなかつた。

ところが九日には、その爆弾を長崎にも落した。私は其日、丁度十一時頃南側の縁の柱にもたれ何げなく庭の方を眺めて居たが、急に勝之の事を思い出した。其時稲妻が目もくらむやうに光つて続いてガラス窓か何かこわれて落ちるやうな、ひどい音をきいた。白昼に、きつねからつまゝれたやうで、夢か現の思いで、家の人にもきいてみたが、「何だつたでしょうか」といつて知る人もなかつた。貫通道路のまがり角で自動車でもつき当つたのだらうか、などゝ自分一人妙な事とばかり思つていた。

丁度同じ時刻に附属小学校で六年間勝之の受持であられた米倉先生が監視の順番で望遠鏡で西の方を見て居たら、井型の白い雲が現れたので「新型爆弾が落ちた」と報告されたら「うかつにそんな事云うものではない」と或人からしかられたと仰しやつた事を後できいたが、やつぱり真実の報告であつた。

所もあらうに長崎に落ちた、ときいた時は、びつくりして早速佐高に問い合せた。(その日は佐高から学徒動員で長崎へ行つて居られて帰校された翌々日であつた)。

「ラヂオでは被害軽微と云う事ですが、どんな風だつたでしょうか」とお尋ねしたら「今からすぐお出でなさい」とばかり云つて一向くわし

く話して下さらなかつた。「でも、もう日も暮れようとして居ますので明日でも参りましょう」と申しましたら、「そんな事云わずに今すぐお出でなさい」としきりに、すゝめられた。

何だか不安の念におそれ乍ら、近所の糸山の奥さんと相談の上、すぐに弁当を作り、終列車から三男清をつれ出かけた。心は急ぐのに警戒警報の中を汽車は這うように、のろ／＼と走つた。

道の尾駅に着いたら「こゝで皆降りて下さい。こゝ迄しか行きません」との駅員のさしずで皆降りた。夜中で暗く手さぐりして降りた。駅の前道の一面に藁が沢山散らばつて居た。闇を通して、かすかに見える前の家は藁ぶきであつた。「此辺は風がよほど強かつたですネー」と側の人に尋ねたが誰も返事してくれるものもなかつた。本当の事を言つてはいけない世の中であつた。

知らぬ家を夜中起すわけにもゆかず、道端に積み上げてある材木に乗つか／＼つたり、田圃の畔道に腰かけたりして一夜を明かすことにした。星のきれいな晩であつた。夜の明けるのが待ち遠しかつた。それでも疲れの為めか、うと／＼として居たら早や明けそめて、氣付いてみたらモンベが夜露で、しつとりぬれていた。側の小川で顔を洗ひ知らぬ道を浦上へと急いだ。

だんだん遠くまではつきり見えるようになった。誰一人通る者もない。四方を見渡すと、おどろいた事には、今迄の長崎と全くちがつた景色である。遠くから眺められた浦上の天主堂はこわれ、町には一軒の家も見えず、山は茶褐色に染じ、樹木も悉く無残に枝は裂け一葉もない、文字通りの焼野ヶ原である。

大橋の辺りで道に黒いものがねて居る。近づいて見ると、疎開荷物を馬に引かせたまゝ車は横にひっくり返り、馬は齒をむき出し、車につなされたまゝ死んで居るし、馬車引さんは手づなを持ちながら、残念そうに死にたえて、破れた地下足袋から親ゆびが出て、足は真黒にやけ、腫れあがつて居た。「あゝ、どこの小父さんだろう」と思わずお念仏せずには居られなかつた。辺りの家は半分倒れかゝり、千切れたふとん、こわれた箆笥の間を、やせこけた野良犬がうろついて居た。町に近付くにつれて、死人が益々多くなつて、足のふみ場もない様になつた。赤ちゃんと母親、老人、青年、子供、誰も彼もが手と足を走つて居る格好のまゝで全身真黒に焼けたゞれ、ふくれ上つて、中には男女の別さへわからぬ真ばだかの人、腹の臓腑がとび出た人、種々様々の死様で、断末魔の苦悶を物語つて居た。

私は身も心も消え入るばかり驚いた。そして狂氣の如くなり「ごめんなさい。なむあみだぶつ」と言いながら、屍の上を、ふんだり飛び越えたりして我子をさがし歩いた。先ず教室に行つてみようと思つたが、大学はどこをむいても見えない。学校の裏の山が岩山であつた事を思い出し岩山を目あてに登り始めた。どこからか、ふと鶏の声が出た。それがとても氣味が悪かつた。人さへ死んで居るのに、どうして鶏が生きて居るのだろうか、と不思議でもあつた。

大学の正門近くに登つたら、石畳だけは元のまゝであつたが木造建であつた大学は、瓦一枚もなく荒野と化してわずかに附属病院のコンクリート建は外観だけ残り窓ガラスなど一枚もなく、こなみじんになつて居た。二本のコンクリートの大煙突は、一本は「く」の字型にまがつて居

た。どなたの御親切か、屍の上に、むしろを、かぶせてあつたが、むしろは少く屍は多く、小さい子供の足、地下足袋をはいた足、ゲートルを巻いた足、女の足、男の足や手が四方にはみ出して居る。修羅場といおうか、此の世の生地獄と云おうか言葉も知らない。

軍人らしい人に出あつたが、「ほんとうの戦場でも、こんなに死人の多かつたところは見た事がなかつた。あなた方は、昨日お出でにならずによかつたですよ。昨日までは大部分の人が断末魔の苦しみで、両側から『水をくれ水を』といつて、すがりついたり、ズボンを引張つたりして通れなかつた。何と恐ろしい有様でしょう!!」と仰しやつた。その悲痛な声が、今にも耳の底に残つて居る。私共も教時間の後には、こんな死方をせねばならぬかもしれないと思われ夢に夢みる心地であつたが、勝之に逢いたいと云う一念で又登り始めた。少し行つたらお母さんらしい中年の婦人に出逢つた。も一人お伴れがあつて、筵をはぐりながら一人／＼の死体を横になしたり、ひっくり返したりして自分の子をさがして居られた。門の少し手前の方で角帽をかぶつたゲートルを巻いた学生風の人に出逢つた。「もし、服巻勝之は御存じないでしょうか」と尋ねたら「服巻君は生きて居ます負傷の程度は分らんが、今眼科の地下に收容されて居る筈です」と云われた時の嬉しさ、「生きて居る、生きて居る……」と、ひとりつぶやき乍らも負傷して居るという言葉が氣にかゝつた。「有難うございました」とお礼をのべた。

あたりには、頭や手に繻帯を巻いた幾人かの負傷者が、石に腰を下して居たり、竹の杖について足を引ずりながら危げに歩いて居る者も居た。消防団の制服を着た人が、担架をかついで通つて行くのに出逢つたが皆

元氣がなく誰でもがつかれに、つかれ、弱りはた様子で其上大変よこれて居る人ばかりだつた。頭に繻帯を巻き頬にかすりきずのある若い学生が、生存者の名簿を手にながら、勝之の收容されて居る眼科の建物を教えて下さつた。糸山さんも生存者の中に書いてあつたのでお母さんは大変よろこばれた。

私達は、こわれた木片がうす高く重なり合つて居る中を通つて教えられた眼科教室に向つた。糸山さんは、もつと上の山の方へさがしに行かれたが、しばらくして、「隼人は山の上で倒れて死んで居ました。屍の上に小犬が乗つて遊んで居ました」と涙ながらに話されお氣の毒で御慰めの言葉も出なかつた。眼科の地下の入口に若い女の方が居られたので、「服巻……」と云つたら「あーつ」とびつくりするように云われて、すぐ内の方へつれて行かれた。真昼だつたが真暗で何も見えない中から、「あゝこつち、こつち」と誰か叫んだ。よく見ると二人並んで寝かしてある向側の人が手を振つて居る。

「あゝ勝之だ」私達は走り寄つた。

「あゝ勝之さん!」「おゝお母さん」「おゝ清も……」涙が流れ出て何から話してよいか声も出なかつた。闇になれた眼でよく見ると、きれいなレースのカーテンを着せ下には白い毛布を敷かせてあつた。どなたの御心遣いか、こんな貴重品の品を、と有難くて涙がこぼれた。

地下室とは名ばかりで眼科教室の床の下で土がゴロ／＼して居た。自分の学生服を丸めて枕にして居た。勝之は苦しうに呼吸しながらも、傍の人を紹介した。寝て居る人は級友で、若い女の人は其奥さんであつた。「今迄大変親切に看護して下さいました。そちらに三、四人居らるゝの

も同級生でよく看護して下さった」と云つたので、私が丁寧に敬礼を云うと、静かに頭を下げられたが、薄暗い地下室で、まるで黒い彫刻みたいだった。頭の繻帯から血がにじみ出て、苦痛に堪え兼ねて居らるゝようだった。一番元氣にして居られたのは尾立源和さんと云うお友達でなか／＼しかつりした青年で、此のお方はどこかのお寺さんの坊ちやんではないかと思つた。大麥落ちついて、よく皆さんのお世話をして居られた。

勝之は、とぎれ／＼の息の中から苦痛に堪えて語るのであつた。「爆弾が落ちたのは九日午前十一時頃だつた空襲警報が解除され警戒警報に入つたので学校では授業が始まつて居た。私は大きな煙突の下で監視をして居た。突然煌いた一大閃光に、『異様な光だ。お互に注意』と言つた。」はつきり勝之君の声をきいたとお友達も話された。「一閃光に伏せたと云つたが、其時人事不省に陥り、しばらくして気がつき横を見たら青木君（親類の同級生）が倒れて居たので『青木／＼』と呼んだが何の返事もなかつた。天地も裂けんばかりの音と共に、たちまち大火となり火の手が迫つて来たので無我夢中で裏山に走り登り弘法大師をおまつりしてある穴弘法と云う岩山のところで一夜を明かした。血だらけの顔と顔、焼けたゞれた学生服、パツタリ倒れて居る者、グツタリなつた友を背中に負う様にして引きずりまわつて居る学友、両側の友人に抱かれて居る者、山をはい登ろうとして力尽きて死んでゆく友、あの恐ろしい有様は一口には言えぬ。あゝ背中とお尻が刺すように痛い、伏せた瞬間背中にこげつくように感じた」と云うので、よく見ると服の背中は焼けて布はなく、ズボンも外側が両方共焼け落ちている。髪も、ろうそくの

炎で焼いた時の様にちぢれて居た。尙も勝之は語りつづけた。「翌日の夕方級友に助けられて、やつとこゝに收容されたが動けない体で、真暗な地下室にねて居ると夜の明けるのが待ち遠く長い／＼一夜であつた。原田君は昨日夕方死んだ。私と並んでねて居たが死んだのでそちらに移された」と指さす方を見ると真赤な毛布に全身包んであつた。

元氣な時、度々遊びに来ておられたお姿が目には浮んで思わずお念仏申し上げた。勝之と大の仲よしであつた。こゝまで話した勝之は苦しい中にも、ホツとしたようになつて水をほしがつたので、清は正門の下まで水道の水くみに行き、途中で恐ろしい死体を見た時の様子を次の様に物語つた。「それは異様な死体であつた。黒い木材の間に下半身は隠れ、焼け太つた両手を大きく開き一本の髪もない頭は、顎から切断され両手の間にぶら下り切断面は真白である。妙な格好だと思ひ、こわ／＼乍ら近づいてよく見ると両手だと思つたのは両足で頭と見えたのは、はち切れそうに、ふくれ上つた畢丸である。腸が外へはみ出している。其人は、腹ばいになり上半身は材木に、はさまれて居た。其左、十米ばかりの所に横たわつて居る死体の手が動いた。其の人は上半身裸で国防色のズボンをはき、素足でおゝむけにねて居て、火傷も外傷のあともなく、肌の色も普通生きて居る人と変りなかつた。おや！生きて居るのか、と思つたら、やつぱり動かない。併し、さつきは確かに動いたのだ。

真夏の太陽はギラ／＼と照りつける。あたりは千々にくだけた瓦と、木片で、死体は累々と重なりあつて居た。天地は森閑と静まり返つて居る。私は血の凍るような恐怖におそわれて、両足はワナ／＼と震え出した。其の人が今にも立上つて助けを求めて私に飛付いて来る様に思えた。

震える足をふみしめながら、正門の下まで行つたら、こわれかゝつた水道から、不思議に水が出て居た。其辺りにも人影はない。又恐ろしさがこみ上げて来た。水筒に水を満たす三十秒たらずの時間のもどかしさ、それが終るなり数十米を一気に走りながら、チラリと横目で見ると、さつきのまゝの姿で横たわつて居る。今にも私の服をつかんで引きもどしそうだ。水筒をほゞり出して力一ぱい叫びたい気持ちだつた。そこへ幸い人影が見えたので、やつと落ちついた。汗がどつと流れ出た。こんなことでようやく水を兄に飲ませることが出来た」と云うのである。

被害が、こんなにひどいとは思わず、勝之に逢えばハイヤーか汽車で佐賀へ連れ帰ろうと思つて着のみ着のまゝで出て来たが、ハイヤーどころか、食べる物も飲むものさえもない有様である。一刻も早く佐賀へ帰り、養生してやりたいと思い「勝之さん佐賀に帰ろうのー」と云つたら、「佐賀迄は、とても行ききらん」と云う。「そんなら矢の平迄行こうか」ときいたら「あ、こ迄なら行けそうなもん」というので、疲れて居る清に「矢の平の叔母様宅は無事であるかを見てきて勝之のことを連絡して来て下さい」といつたらすぐ出かけた。途中何度も空襲にあつたそうである。県庁あたりまで行つたらやつと見えたそうで（矢の平は金比羅山の向側故、山でさへぎられ被害少なかつたが）窓ガラスや壁は落ち家はゆがみ荒れては居たが建つて居たのでホツとし、着くなり勝之の容体をくわしくお話ししたら、丁度迎えに出かけらるゝところであつたと云うことである。

昨日も今日も勇叔父さんが原爆地まで出かけ、力いっぱい声をはり上げ、昭三さん（叔父さんの一人息子さん）や勝之をさがされたが遂に見

当らず、裏山の方で角尾学長に出逢つたら、全身にひどい負傷をおいながらも生き残つた学生を鼓舞して居られたそうである。勝之が眼科の地下室に收容されて居るとき、伝え、重要品や担架を車に乗せ秋子叔母様も一郎さんも清と共に迎えにお出下さつた時は大変嬉しかつた。今日ももう日は暮れかゝつて居た。

佐高から一緒に入学した久野文次郎さんや其他の方々々が各々頭や手足に繻帯しながらお見舞ひに来て下さつた。「服巻、頑張れよ、死んでたまるもんか！」と元気づけて下さつた。勝之は有難うとは云つたが、苦しうなので何か注射して下さつたが痙攣を起した。勝之さん〜と呼んだが意識がないようである。今度はカンフルを続けさまにうつつて下さつたら、フ〜と息をふき返し意識を取りもどしたので急いで担架に乗せた。発熱四十度を越えて居た。お友達は「これは勝之君の靴だ、カバンだと取そろえて下さつた。靴は全く変色しこげて居たが、カバンはきれいに元のまゝにして居たのが不思議だつた。中をあげて見たら此前帰省した時渡しておいた真宗聖典や非常時用の品々、学用品、お米もはいつて居た。

有難く受取り御礼をのべ名残を惜しんで皆さんと別れ矢の平へと急いだ。途中熱を計つたが八度に下つて居た。疲れて居たせいか重い事〜人間一人がこんなに重いものかと幾度か悲鳴をあげたかつたが代つてくれる人もなく我慢に我慢してやつとのことで何キロかの道を四時間もかゝり夜になつて無事に着いた。早速きれいなおふとんを敷き静かにやすませて頂いた。今迄ゴツ〜の土の上になて居たのが、ふんわりとした絹夜具にねせてもらつた勝之は大変よろこんで、皆さんの御親切を感謝

した。青木の御祖母様も御出になり何くれとお世話して頂いた。夕食を少し頂いたが熱は益々昇り一刻々悪化してゆくのが目に見えて、じつとして居られぬようだった。

「代られるものなら代つて上げたいなあ」と思わず言つたら勝之は「イヤお母さん達は清蓮の事にまだ責任がある。私が死んだ方がよい」と云つた。其声が鼻にかゝつて悲しくきこえた。突然右の手を前に出し「まだ手は動く、早く紙と鉛筆を」といつたので書かせようと思つたが「そんなにづらいのに書かんでも、あなたの心持ちは、よく皆がわかつて居るから無理しなさんな」と青木の御祖母様はおとめになつた。外傷のやけどはよくなつたが排尿排便に苦しんだ。其夜は私と清と側にやすんだが、疲の為めか清はいつになく大きないびきを立てた。勝之は「清のいびきはB29のごとあつた」といつたので清は大変すまなかつたと気の毒がつて居た。

ほのぼのと又夜が明けた。清は佐賀に食糧やお薬をとりゆき勝之の容体の報告に出かけたが、その留守中に勝之はグツタリなつてもものも云わなくなつてしまつた。

原爆は火傷ばかりでなく内臓も骨も否、骨の髄までおかす恐ろしいものとは知らなかつた。首をじわり／＼と絞めつけて、ついに絞め殺すようであつた。どうにも、ほどこそ術もなく親としてその残酷さを側で見て居らねばならなかつたのが何よりつらい事であつた。

佐賀ではうちが医者であつたのを幸い、色々と沢山のお薬や食糧を取りそろへ長男保正と清と折返し走りつけて来たが、それも間に合わなかつたのは残念であつた。

深町家でも秘蔵のお薬まで出して来て色々とお親切にお世話して頂いたが原爆には、どんな高価なお薬も何のきゝめもなく、とう／＼空しくなつてしまつた。詮方なく火葬しようと思つたが火葬場もこなみじんに焼け落ちていたので附近の小学校の校庭に行き、保正と、私と清と三人で木材を拾ひ集めお正信傷をくり返し／＼誦しながら涙ながらに火をつけ一握りのお骨を抱いて佐賀に持ち帰つた。

実に御文章さまの教の通り、朝には紅顔あつて夕には白骨となる” 敲しい諸行無常の人生相をまのあたり体験せしめられ唯念仏申すのみだつた。

故服 卷勝之 大正十二年九月三日生

昭和十八年佐賀高等学校卒業 (当時学部三年)

やさしい子

溝口陽介

昭和十九年だつたかと思ひます、自分(父)が風邪の気味でやすんで居つた所、哲郎が帰つて参りました。

唯今と云つて、枕元にどかりと坐ると、「はい」と云つて差出したものは、巻煙草八、九〇本位でした。途端に嬉しいよと云つて、目頭の熱くなるのを覚えました。当時愛煙家にとつて巻煙草が、如何に貴重なものであつたかは想像の外です。

そして「この半分は山高の米沢先生に上げる、先生の坊ちゃんも冬の寒い朝早くから煙草屋に行列して居られるのを見ると気の毒でたまらぬ」と申しました。

「どうぞ持つて行くがよい」そんなことで二、三日後に山口に行きました。どんな偉い子供になるよりも、この心やさしい子は、私と共に未来永劫に生きてゆく事でしょう。

故溝 口 哲郎

(当時学部二年)
山口高等学校卒

日 記

百 崎 欽 一

昭和二十年八月九日

午前 淵田氏来宅。

午後 ラヂオを放送局に持参検査を請ふ。服巻看護婦来。早朝芳子桃川行切符を求めしむ。入手。

スマ子(長女)等四人高木瀬行。

警防課より材料薬品持参。

八月十日

唐津線にて桃川行。夜樋渡宅着。ハマ既に起床せり。持参のブドウ糖注射。

記念短冊を認む。

汽車中、角田衛生課長同車浜崎へ行く。

昨九日長崎の爆撃被害は大なる由早朝県より長崎県知事の要請により応援救護班三班を送る。鹿島、白石、武雄よりトラックにて長崎市行。

八月十一日

早朝帰宅。車中又角田氏在り、長崎救護の再度必要なるが如し。医師会館に立寄り帰宅。次で応援班三班の出動要請来る。神埼、西松浦、小城より出動せしむ。

知次郎の消息全く不明不安愈々加重し来る。中ノ小路糸山は家族本日長崎行の由。

八月十二日

早朝芳子長崎行切符を求めしむ、道ノ尾迄発売。

知次郎を尋ねて長崎行。

佐賀駅にて待避中銃撃、弾撃の音近し。

午前十一時一四分汽車出でず。午後一時過ぎ出発。佐賀鉄工所側、牛津本町爆弾にて破壊せり。車外待避一回。午後七時前長崎駅迄汽車行く。徒歩にて片淵町知次郎の宿所松尾宅を訪ふ。知次郎は帰らずと。嗚呼、一縷の望みも絶ゆ。

夜野上方にて松永に逢い他の学生等より情况进行を聞く。惨想像に絶す。

松尾宅泊。

八月十三日

松永の心配にて同級生長田学生を依頼大学へ案内さる。道も幾度か路傍の壕に待避しつゝ午後一時半大学跡に辿りつく。空漠一物も止めず。

病理教室の跡に竹ち線香をたき涙の中に点々たる黒焼白焼の頭蓋骨を拾ふ。此中に知次郎も在す可し。附近に樹影とてもなし。炎天下弁当を開き学生と共に昼食。帰途大病院に立寄り本部に今後の処置を問ふ。行方不明者は追つて死亡確認の上通知す可しときく。学生に別れ单身長崎仮駅に出で切符を求む。無し。証明を貰ふ。又幾度待避をつゞけて宿所に帰る。一応知次郎の遺物を整理す。馬島は予より先に兄貴来崎せるが本日夜佐賀へ帰る。夜浦川を訪ふ。無事。

八月十四日

野上、松尾の女達外学生に依頼衣類、布団、荷造り、書冊整理再び長田学生を煩はし運搬車にて荷物を長崎駅に運ぶ。チツキは救護材料として受付く。

手に重きトランクを持ち乗車。午後一時頃発車、長崎を外へ、思い出の知次郎最後の地、学校を偲びつゝ合掌。

あゝ、知次郎は帰らず。何といふ可愛いゝ子なりしぞ。純真なる母思いの姉思いの子等思いの、無垢清浄の邪念を持たぬ、街ふ事が嫌いな我子乍ら出来過ぎた子なりし。扱て之より何として淋しき生活を送る可きか。

午後六時頃帰宅。家族一同を集めて報告只声をあげて泣くのみ。

されど知次郎は帰らず。されど知次郎は犬死はせぬ。学生が学校に登校し授業を受けつゝ教授と共に同僚と共に一瞬運命を共にしたるは学生の自分を全ふしたるもの。予が平素の教訓も此点にありたり帰宅すれば我家も十二日十一時頃機銃掃射を受け二階三畳の窓ガラスは破れ

弾丸は一ケは瓦に落ち、一ケは中庭に落ちて其儘にあり。県警察部にて部長外三名殉死B25六機の襲撃による。

故 百崎刀郎遺句

子を探す残暑の焦土弁当下げ
妻かなし亡き子の友に蜜柑もぐ
花を売る露店も出来て原爆忌
耶蘇の鐘仏の鐘や原爆忌
子の墓へ花のかはりの豆の飯

故百崎 知次郎

大正十三年七月二十二日生
昭和十九年 佐賀高等学校卒業
(当時学部二年)

あの日のこと

父山 田 義 夫

爆弾投下の前日八月八日は当直だと云うので夕方登校した。今度広島に落された新型爆弾は大変なものだ、爆撃されたら自分の書物は一まじめにしてあるから持出して呉れ、と妹に云いつけて出かけたが翌日大学で原爆にやられた。

十日夕方連絡の学生が敏夫君が助かったと知らして呉れたが其日は遂に帰らなかつた。翌日は待ちきれず妹の百合子と二人で穴弘法方面にさ

がしに出かけ漸く大学で治療中を発見し、全く死んだ子が帰つて来た喜びを味つた。本人の語る所によると受講中、「ピカツ」「ドーン」鳴ると同時に屋根が落ちて出口は閉ざされ、自分は梁を伝つて屋根の破目から飛び出し穴弘法に避難した。怪我は大してして居ないが疲労甚しく食欲はないとの事、又下痢が止らないので医書を引出し自己診断して居たが、どうもこの下痢は不思議だ、姉が加津佐の栗原医師に嫁して居るので加津佐に行つて研究すると云つて居た。

十三日から発熱し輸血カンフル等手当したが及ばず十五日の終戦放送に日本の敗戦を知り落胆。

十六日午後九時三十五分呼吸はげしくなり「もういかん／＼」と云い乍ら見守る家族達に幾度も、うなづきながら新中川町六九の自宅で息を引とつた。行年二十二才雷鳴の中を伊良林小学校々庭より昇天した。

十一日帰宅した翌日は見舞の友人達と語り合い煙草を吸う位ですぐ元気になる事と思つたのに。運命か、ああ、生者必滅。せめて世界平和の礎となるならば医に志した学徒の本懐とあきらめん。

故山 田 敏 夫

(当時学部一年)

死亡者名簿 (医学部)

(1) 仮卒業生

岩崎誠彦 大嶽乙哉 柴田清
鈴木四郎 寺田文彦 村上吉作
村田千秋

(2) 四年生

相川清澄 相羽正 青木武
今西章 今村喜人 岩切達
上原利之 梅原正幹 大津昇久
奥和夫 鬼塚正英 清崎裕之
久保哲雄 古賀典志 蘇百齡
園田哲郎 戴懷德 谷口誠
土肥達一 徳山達人 中尾守男
永見敏樹 新名清隆 西憲治
昇雅夫 原田清巳 服巻勝之
日高和郎 肥後実 平井達也
穂坂純一 宮城美津次 宮本精一
毛利元次 林中鳳 脇川恭一
(3) 三年生
赤松雅弘 和泉哲朗 白井進
大池未知生 大浦裕 奥田光男

(2) 二年生

片山道生 神木咲次郎 瀧口薫
陳克振 野口修 花田紀
古川一郎 三島俊夫 山崎静夫
荒木宗雄 五十嵐國人 生駒晋助
池西清 糸山隼人 稻垣明彦
江口宏 小川三郎 大場次郎
大東弘 太田祐司 奥田滉一郎
奥村巖 加藤良明 何振欽
風早哲郎 川上平藏 岐部謙治
桐原研一郎 久保道也 黒田省作
小西淳 古賀洋一郎 後藤祐碩
酒井克次 坂中善視 治村広三
白川清志 新開常弘 須沢俊吉
菅道之 鈴木俊夫 田中喜八郎
田中淳一 平良浩 高木劉一郎
竹田実 谷村新二郎 津和恵吉
飛沢寛治 豊田正倫 中尾敏行
中山謙吉 羽立俊雄 馬祖詒
林喜保 樋渡浩二 東秀昭
深江久一 藤井伊織 堀家潤
堀部健 三村寛

平川栄一	箱田吉清	新田寿男	中村清一郎	中山哲夫	谷山浩二	高橋浩二	菅原寮二	佐賀章生	古賀光毅	桐山真克	川口賢一	片山登	大西欣二	市川幸男	石塚裕夫	伊藤裕夫	青山賢治	(注) 一年生	山田滝雄	森芳信	簗田正勝
藤田襄	肥田栄一郎	野口健一	西田英司	中瀬哲夫	近石文亮	竹本盛男	鈴木盛男	篠原邦夫	児玉望	草野肇	川崎正之	金宮賢治	大西俊夫	植田泰輔	石橋忠	猪股信安	浅井明		山本克弘	森内薫	村田司
藤野祐一	百野秀雄	野津恭	西谷重	中司和夫	鶴田十四夫	立石和生	瀬口恒雄	島田秀三郎	高妻秀夫	古賀宏次	吉良信明	金山禎祐	大原健	上野弘男	石橋若月	石井一徳	浅山明生		米沢健治	山田邦久	百崎知次郎

二年生	三年生	四年生	学 年	この中で日本名を名乗っていた台湾人学生とその本名	和田正人	吉永亮	山根繁	桃原敬太郎	嶺脇秀雄	松浦重信	古坂光毅
神木眺次郎	和泉哲朗	徳山達人	日本名		米谷襄	横山嘉夫	山田清孜	山田敏夫	宮地信義	松浦勤	前橋裕
李釣光	楊炳煌	羅時達	台湾名		龍頭集	吉岡忠幸	山田敏夫	村田修策		溝口常一	松井日出雄

▽看護学校関係△

長崎大学医学部附属看護学校沿革

創立 長崎県立病院附属看護婦養成所として発足、修業年限二ヶ年で看護婦科並に産婆科を置く(創立年

月日は其の資料、原爆の爲め焼失判明せず)

大正十一年四月 長崎医学専門学校附属医院看護婦養成所と改称

大正十二年四月 長崎医科大学附属医院看護婦養成所と改称爾来二十四回卒業生を送る

昭和二十年四月 長崎医科大学附属医院厚生女学部と成り第一回生一〇〇名入学

昭和二十年十月一日 文部省国民教育局長通達により厚生女学部卒業者を入学者検定第十一条により高等女学校卒業者と

同等以上の学力を有するものと指定さる

昭和二十年十二月 原爆の被害を蒙り病院と共に大村国立病院に移る

昭和二十一年 諫早市永昌町海軍病院跡に移りその間看護婦生徒の養成は続行され修業年限三ヶ年に延長教育内容の拡充を図る

昭和二十三年三月 官立医科大学附属厚生女学部改組要領に基き本校は乙種、甲種の二本建となり乙種を普通科甲種を専攻科と名称し保健婦助産婦看護婦令に基く新制

度看護婦の養成始まる

昭和二十三年六月 厚生女学部専攻科(甲種看護婦)修業年限三ヶ年

生徒定員四〇名

厚生女学部普通科(乙種看護婦)修業年限三ヶ年

生徒六〇名となる

昭和二十六年三月 厚生女学部普通科として最後の卒業生三八名を送る

昭和二十六年二月 曩に長崎大学看護学校として指定申請中のところ

甲種看護婦学校として承認され今日まで五回の新制度による卒業生一〇六名を出している

(附記)

昭和二十三年七月三十日 法律第二〇三号を以て保健婦助産婦看護婦法成る

この法律において甲種看護婦、乙種看護婦の二種となる

昭和二十六年四月十四日 法律第四百七十七号を以て甲種、乙種は廃され看護婦、准看護婦となる

婦、准看護婦となる

元来、看護婦養成所は二年制度で生徒は卒業後の二年間大学附属医院に勤務の義務があつた。

昭和二十年四月、従来の看護婦養成所は厚生女子部となり第一回生百名を迎えたばかりであつた。

四月に入学した一年生百名は、午前中七、八名ずつ臨床各科に分散して実習を、午後は一緒にたつて講義を受けていた。

二年生は十九年四月に八十名入学し、当時は各科に固定配属されて教育を受け、一堂に集つて講義を受けるのは、週に一、二時間位であつた。尙右の厚生女子部の生徒を除き附属医院に勤務中の看護婦は百八十余名で、その内の一部は報国歌隊として事ある毎に出動していた。

被爆時の状況

一年生は各科で実習中、被爆す。二十三年三月の卒業式に卒業した者は百名中三十二名で、残り六十余名の大部分は爆死したと思われるが、入学後日も浅く又資料も焼失のためその詳細は不明である。

二年生は八十名中四十四名が卒業し、残りの大部分は各科病棟或は寄宿舎で爆死したと思われる。

生徒を除く百八十余名の看護婦のうち五十余名が爆死した。

死亡者名簿(看護婦)

(イ) 看護長

内田 敏子 江下 スム 田中 米子

中尾 ナツ 満島 ユリ

(ロ) 看護長嘱託

有村 シゲ子

(ハ) 産婆主任

園田 チカエ

(ニ) 副主任看護婦

菅 ハルヨ 松岡 トシエ

(ホ) 看護婦五年生

大坪 和子

(ヘ) 看護婦四年生

井上 光子 岩下 スエ子

緒方 ヒサカ 加藤 トシ子

小崎 タケノ 霜川 アサノ

中野 キクノ 中山 ヨシエ

馬場 君子 橋川 ヤスノ

橋本 道子 浜 トモエ

原 衛子 舩 黒 サエ

松本 幸子 峯 逸子

山下 秀子 吉田 シズヨ

(ロ) 看護婦三年生

井上 ミツネ 岩崎 松子

川崎 信子 倉橋 満寿子

長浜 イト 西下 ミヨ

浜田 美幸 藤田 和代

松尾 タツヨ 松本 リキ

山口 ヒロ

(ハ) 看護婦養成所生徒二年生

荒木 信子 井戸 洋子

磯田 千代子

(1) 厚生女学部生徒一年生

山下ハル	松本綾歌	増山貞子	淵野フジエ	藤井セツ子	野田マサエ	塚本秀子	早田タカエ	五嶋マチ子	大久保夏江	岩永君枝	吉田喜代子	宮本ハルエ	保家信江	浜辺ヨシ	田中松枝	川口シメ	大柳ツヨ
吉本キミエ	光井チヨル	松園節子	古巢ヒサ子	藤山ハルノ	半泊ハマ子	中村六江	谷口千鶴子	品川ジツエ	川上アサエ	江林キヨノ	吉本ミシエ	武藤サトエ	光永良子	林末子	土岐富美子	川谷ミチ	大山フヨ子
山下栄子	松藤マサ	前田節子	藤山ミキエ	福島スギエ	野田ツキ子	谷村セツ	白石チツ子	河野鈴子	小川和子	若松嘉子	湯川明子	峰ヨリ	平山タヅ子	橋本ユキノ	河田久枝	櫻山房枝	